

增補雅言集臨見

七

813.6
I 619g
N28



813.6
L619g
Nov



691323

増補雅言集覽卷之七

石川雅望集
中島廣足補

○仁之部

〔に〕荷（續紀）廿一、荷オモヒ重力弱之底（新六帖）二、信實「とにりくは大原山のにをおも冬ハ

そと木をこりやそふらんおもに（後撰）賀、御製「年の數つまんとそある重荷にいと

ぶこづけをこりもそへかんにの緒（延喜式）八、トシコヒ祈年祭祝詞自陸往道者荷緒縛堅

氏（万）二、十「東人の荷向ハコ筈の荷之緒コノにもいもゲ心ハコにのりにけるかもに鞍（夫）廿七、

郭公「朝さち駒のにぐらをいそれおきて聞おせつる時鳥ハコりか（盛衰）十九、佐々木馬を取下向の段

雜鞍おきたる馬追ふて男一人とえ來とる云々あき人馬のくせかれバえとつめかた

うしてあづまざりけり云々荷ぐらよのつて鞭を打むさの宿よて知たるものに鞍を

こひ夜を日につぎて下りけりに負馬（天武紀）四、上伊勢國ニオヒツヤ駄五十匹補（新古）雜下增

「いかにせん身をうき舟のにをおもみつひのとまりやいづくなるらん

〔に〕抄てにをこの常のににに常いふ（拾）物「あづまよてやいれとる人の子ハコ云

〔に〕是も常のにかれど（後拾）夏「月りけを色にてさける卯花ハあけバありあけの

こ、ちこそせめ **に**て **同** **(古)** いいう 「山吹の花色衣ぬゝやそれとへどこへぞ
くちあゝよして **(源)** せま **九** い つら又春の都の花をまん時うゝあへる山賤に

(拾) 傷 さぬきのささねの鳥にいていそやの中よてかくをたたる人を見て **(十訓抄)**

十一 山田法師の非人よして同集をけがせ **(つぎ)** 五 **十** た くまよしてやささま、

あるの失のもとあり **に**て 是にナツ **(源)** こてふ **八** おまへよこさる廊をかくや

のさまよしてかりよあぐらどもをめたり

に 是の故に **(枕)** 五 **廿** たぶおくれとと思ひつるに人目もいらせとられつるを **(源)**

あう **一** **卅** い とろくやつまゐるにああづらはしやと終さう 云々 **(同)** か げらふ **三**

うき舟かくもあちおきさるに心やそくて人もいひおろし給ふかりけんりと思ふ

よも **(同)** 松風 **十二** 琴 人もあきたる方 方ヤ故 **打** とりてまこゝひくに松風といた

かくひまきあひさり

に 是の物をの意也 **(古)** 戀 **五** 「それをたし思ふ事とてさう宿を見きとあひ

そ人のきりくよ **(竹とり)** **こ** さうにあ給ひを屋のうへよをるひとものきくに

(源) 君 入り給へ **い** とらいたく打とけてあやさふる人どもの

侍るよと聞えさせ **(新古)** 夏 **庭** の面なまさかさうぬに夕立のそらさりけかく

める月哉 **かく** **に** かくいぬとのべたる **(古)** い **一** む つことまよつきあくよあ

けぬめりいづら **秋** のあがしてふ夜 **(同)** 戀 **四** 河 原 **「** そ ちのくの志此おもぢぢり

誰故よとされんと思ふわれからかく **な** **に** 是も同但軽くいへる **(古)** 夏 **「** 郭 公

これとのかしに卯花のうた世の中は鳴とさるらん **(同)** 戀 **一** あ さぢふの小野のしれ

原のふとも人するらめやいふ人か **し** **に**

に 此ににともへともかよとしいへるやうな理但れが中に必にとのまひひから

ひたるあり俗にいなべてへのまいへればにとへとをあらべて抄し出しつ猶心

み味ひて **(伊勢物)** **段** む つきの十日をりのそにそりけり **(同)** 五 **東** の五

條とさりにいと志のびていたれ **(同)** 六 **女** をおおくに **お** **い** **れ** **て** **(同)** 七 **京** よあり

さびてあづまにいたれる **(同)** 八 **あ** **づ** **ま** の方 **に** **あ** **き** **て** **そ** **の** **所** **も** **と** **む** **と** **て** **(同)** 十四

とちの國にそるよあき **い** **の** **よ** **け** **り** **(同)** 卅 **二** む さらの郡よかよひける **(古)** 旅 **仲**

磨をもち **し** **に** **物** **を** **ら** **そ** **し** **よ** **つ** **り** **い** **さ** **り** **け** **る** **よ** **(後撰)** **別** **伊** **豆** **の** **國** **よ** **な** **が** **さ** **れ** **侍**

りけるよ **(拾)** 秋 **竹** 生 **し** **ま** **に** **ま** **う** **で** **侍** **り** **け** **る** **時** 云々 **(源)** 桐 **壺** **廿** **や** **が** **て** **こ** **の** **内** **に** **い**

れ奉り給ふ **(同)** 廿 **一** **此** **こ** **を** **鴻** **臚** **館** **に** **つ** **り** **い** **さ** **り** **(同)** う **つ** **せ** **三** **十二** **條** **院** **よ** **お** **い**

ま **い** **ぬ** **(同)** う **き** **舟** **四** **東** **山** **に** **ひ** **り** **御** **ら** **ん** **と** **ど** **かん** 云々 **(い** **せ** **物)** **段** **け** **さ** **う** **け** **る**

女のもとにひよきもといふものさやると **(同)** 十六 **ね** **ん** **で** **ろ** **に** **あ** **ひ** **う** **さ** **ら** **ひ** **け** **る**

友たちのもとに文詞云々とかれて(同)段廿五 あつともいひざりける女のさそがかりけるがもとにいひやりける(同)段廿七 女のもとにひと夜いきて(同)段廿四 つれかりける人のもとに(大和物)一此物いそぎ給うける人のもととおこせさりける(同)監の命婦のもとに中務の官おほいかよひけるを(同)ま、父の少將のもと歌云々

(同)おそト人おそトこの御もとにひさしくおほいまさざりければ(同)男のもとまよとしておこせ給へりけり(いせ物)段十一 友さちどもに道よりいひおこせける(同)卅二 物いひける女一年をろありて(大和物)一かの宮の北の方奉りける(後撰)別遠くまよりける人歌云々。すべて(物語ぶみ)の詞書と同例堀川百初「かざりありて春もをかばにかりぬれば越路かへる雁ぞかくある(貫之)一打一のびいさすこの江にこすれ草われれ一人のまたやつまぬと(散木)むろ七大寺をぐまに故帥大納言殿おほいまさりけるに

にとかさね(古)下春雲林院のこのもとに花見に北山のもとにまりける時に(伊勢物)段九 京にろの人の御もとにとて文りきてつく(後撰)別 下野にまりける女に(同)同 旅にまりける人に云々(後拾)段四 則光朝臣のもとにちの國に下りてにととまトへたる例(古)下京へまうでくとてうこかりける人によとておくりけ

る(同)旅 但馬の國の湯へまりける時にふこの浦といふ所にとまりて(同)上秋僧正遍昭がもとに奈良へまりける時は男山にて(同)別 ちの國へまりける人に(後撰)別 遠き國へまりける友さちに(同)同 信濃へまりける人に(拾)上初瀬へまて侍ける道に佐保山のもとにまりり宿りて侍りけるに云々(枕)七とて文に云々進上如件少納言殿にとて月日かきてこまのかりゆきとておくよ云々行成卿より清にたとふれにか(源)一ひ光三侍従の君にとうへにかきつけり云々柏木の(同)夢のうきとし四入道の姫君の御方に山よりとて名りき給へり僧都の消息文のうりさもあるべく思ひる。同例也附へ(伊勢物)段六 内へ参り給ふに(同)段十一 むろト男あづまへめれけるよ(同)段十二 人の女をぬすみてむさし野へるてめくるとに(同)段十四 男京へかんまりるとて(同)段十六 あねのさきたちてかりさる所へめくを(同)段廿三 かつちへいぬるるにてこれに云々かつちへいかせかりまけり(同)段十八 とうとてとの櫻の花ざりけりに其宮へかんおほいまりける(古)旅 ある人男女もろともに人の國へまりけり(同)同 あづまの方へ友とまる人ひとりふたりいさかひていきけり(同)別 友たちの人の國へまりけるによめる(同)同 相をて侍りける人のあづまの方へまりけるをおくるとて(同)同 友のあつまへまりける時はよめる(後

る、不どよまりもいあまゝ(玉) 一、經「くやいさのそふばかりたよをまにせばと
そる、迄にとまさらめや」

庭 (和名) 十 庭屋前也 瀬波 (後撰) 冬よ三人 (拾) 冬貫「よるあらし月とぞ見まゝ
とぐ宿の庭白妙にふりつもる雪 ふれる。いづくよもいふべ (順) 三 屏風の歌ゑのさま
をいへる題、五月五日庭に馬ひりせて(同) 四 卅七月七日庭に琴ひく人あり(同) 九 十七
月七日女庭におりてたかまをまつる 云々 (源 わう紫) 四十 庭のそなでも玉をりさね
たらんやうにええてか、やく心ちるるに(新勅) 兼一「いとゞく花も雪とぞふる
郷の庭の苔ぢの跡とえにける にそのおも (古) 長歌 あられとぞれて霜氷いやりさま
れる庭の面に 云々 **庭** にそのおも (宇治拾) 九 十 こかへ参れといへば庭中に参りてゐた
るに にそさらせ (うつろ 菊の宴) 下五「うらまつ、むかしくからまされさへやにそ
さらせあく蟬とあるべき にそがくれ (六帖) 上「さきとて、今のあらとと思ひしを
庭ぐくきても匂ひぬる哉 にそのあると (夫) 十二「故郷の庭のあるととなりけり
のこりゝのべれさを鹿のこゑ にそのともいひ (夫) 十 定「秋とにえぬそい合の
小夜ふけて光りあらふる庭のともいひ(同) 同後「そい合のそらの光りとある物の
くもるの庭にてらまともいひ **大にそ** (平治) 中 待賢門 軍の所に 大將軍に目をかけて大庭の掠

の木を中に立て左近の櫻右近の橘を七八度迄追まへりて(盛衰) 五 三 東阪本に下り
つ、十禪師の御前にて 云々 各ねんトめをおる庭へ投たりけそ(同) 十三 九 信つらと
来りゝ六波羅の大庭に引をるそ **小にそ** (同) 一 や 布衣のつらものを殿上の小
庭に召おき 云々 (宇治拾) 八 山伏の 云々 さふらひの立部の内の小庭にたちけるを 大
小庭共いづく そひりのにそ ハヒロ の所に **紫の庭** 玉 のにそ のふひ
にもいふべ 庭 モ セ ニ の 意 に て 庭 も せ バ き を そ に 草 な ど の ま け を い ふ、
部に出そ にそもせよ 野 も せ よ、道 も せ よ、山 も せ よ、あ ど い へ り 猶 世 の 部 も 出 し つ、
庭草 **庭づくり** **庭乗り** のたぐひ 別 又 出 す
庭 道場の場也俗 氏のお心を大 **政の場** **散木** 上 五 あまのそらにいたなび
ける雲もあくまつりてとの庭にの宮をまもる神力をあひせ給ふあまり **軍の場**
(盛衰) 九 初 これ 戦 場 に む か ひ か バ 云々 これ 軍 の 庭 よ 出 て 修 羅 と う ト や う の 劔 よ あ
さりか 云々 (保元) 上 十 合 戦 の 場 と い へ り **御法の場** (夫) 四 後 「 こ い の 山 の
りのにまよちる花をよしの、とねれあらしよぞみる **講の場** (宇治拾) 九 菩 提 講 の 庭
に参り給ひけれ 云々 ま こ と 講 の 庭 に も 其 く ち か を 侍 り し り と も **ど** う れ の 場 佛 入
いふ(後拾) 六 山 階 寺 の 涅槃 講 に ま う で、 云々 光 源 「 い し へ の 別 れ の 庭 よ あ へ り
ともけふの涙ぞ涙ならまゝ **其にそ** 其 の (宇 治 拾) 十 二 廿 一 忽 ま そ の 庭 よ 射 ぶ を 事

五

社行幸にも庭の坐とてあり又かへりさちともいへり神に庭立ある事也云々

にまた、き(續千)物名にまた、き歌云々鶴鴝也とぞ補(拾愚)上「さらぬたは霜が
れまつる草の葉をまづ打むらふ庭た、きりな

にむとづ源(和名)四唐韵云潦音老雨水也爾八太(万)九廿「みと、ま、島をこる

時庭多泉をぐる、あみざとめぞりねつる庭よままれる(拾)戀「よと、もに

雨ふる宿のにむとづとをまぬにりけりこゆるものりの(後拾)法師夏「五月雨のを

やむけしきのえぬ哉にむとづとのと敷まさりつ、(狹)四十上「いつ迄とあらぬあ

がめのにむとづとうたりとあんでこれぞけぬべき補(風雅)春下「つくくと雨ふ

る郷のあむとづとちをてあまよる花のうさりと(同)夏後西園寺入「月うつるま

さでのうへのにはとづみ跡までと、夕立の雨(玉葉)春上九條「つくくと春日

のとけきよむとづと雨のかほみるくれぞさびしき(同)夏順徳院「夕立のあてりそりり

のにむとづとひをろもきりぬかむづなくあり(万代)正三位「とせられて世よふる

雨のよむとづとをほさやありし影をさに見ん

にむづくり庭(新六帖)二信「宿めてりひこそあけを苔の上れ庭づくりせぬ山の

岩うと庭をつくる意よてにむつとりにむつとりの所は附せ

にそのり庭乗。馬場ならず庭に。体の(盛衰)一段 御隨身清房が三黒といふ小馬を

給いつて庭のり仕ける不どに

にそのを庭訓の(新千)雜上「聞おきしことのもてとに忘れぬ庭のをしへの

秋の白露(同)家中「末遠き若々の草のみどりより庭のをしへの跡ぞたがぬ(同)

同中「若草の末さのもし陰ぞとも庭のをしへのををる人ぞしる

にむくなふりとつぎをと庭のおも庭のともび庭の所庭の草千

庭の梢抄のたぐひ

にむくさ庭草。た、庭の草也(好患)三月「朝なく庭草とるとせし不どは妹が垣根のうそ

らぎにけり(万)十四「庭草にむら雨ふりて蟋蟀之なく聲きけバ秋つきまけり補(万

代)鎌倉右大臣「庭草の露の敷をふむらさめは夜深は虫の聲ぞあしき(月詣)天台座ふ

みさけてかくあかりにかりまけり物おもふ人のやどのにむくさ

にむくさ皮膚。是今の(和名)廿地膚瀬波久佐一云 末木久佐

補にむやを庭柳(夫木)三「よむやををりたがへるは長月の菊の花とも見ゆる

かりけり(拾玉)四「殿作せむやり水の岩うけにあらさ色こき庭やまきりか

にむさくら庭櫻。た、庭の櫻をいふ(拾)春「朝とにむがはく宿の庭さくら花ちる不どは手

もふれでみん(後拾)下庭櫻のおそくちりて侍りければよめる和泉式部「風たよも吹
そらぬぞ庭櫻あるとも春のうちイヤと見えてま(永久)兼昌「木のもとにちり
つもりたる花をこそ庭櫻といふべかりけれ庭のさくら抄をるに及ば

にそび庭燎 (和名)九十二庭燎燎庭火也邇波比毛詩 (古語拾遺) 四アケ舉庭燎巧俳優相與

歌舞大方神樂の (源) とら下廿神樂にいびもかけしめりさるに(枕)七廿臨時

庭火のけふりのそそののりたるにかぐらの笛はおもしろう云々(新勅)神祇成實「立

ろへる雲井此月もかけろへて庭火うつろふ山あるは袖(夫)十八小弁「吹たつる庭火の

まへの笛のねを心そみてや神もきくらん(同)院同安嘉門「やの山庭火のめく松

風よあづまのそらべ聲かよふら補狭衣下三ふけゆくま、に雪をりくふりつ、

こがらあらくうふきささる庭火もいさうまよひてふきりけらる、をそら

ひこびつ、

にばめる末のにび色の所は附そ

に不 (和名)十八鶇鶇郭璞方言注曰鶇鶇野鳧小而好没水中也野王按鶇鶇其膏

可以瑩刀劍者也辟低二音 眞淵云此鳥ハ鴨交りりて鴨より小き是をかいつぶ

りともいへり(六帖)三獨のみつのり江よをむ鳩の底たえも戀こるかあ

に不とり (万) 四五 二寶鳥のかづく池水心あらば君よこがこふて、ろいめさね

(後撰) 春中宮 (六帖) 三 春の池の玉藻よあそぶ鳩鳥のあいとさき戀もる哉

に不のうきを鳩の袖中抄三あふ事のさぎさよるに不のそれうきみづみ、

物をこそ思へ顯昭云に不といふ鳥の巢ハ波の上につくり置てあるおれハ云々(無

名抄) 下子を思ふ鳩のうきをのゆられててトとをれやみぐれもせぬ祐盛法

師此歌を難下ていく鳩のうきをゆられありくべき物にあらせ海の汐みちひ

る物おれバそれを知りて鳩のすをくふにハ芦のくきを中にこめてありもかれ不を

やくつろけてめぐりよくひされバ汐みてハ上へあがり汐ひれハたがひてくたる

也(新千) 雜上式子 内親王 「そらあいや風にたよふ波の上ハ鳩のうきをのさても世よふ

る(夫) 廿七順 院 「からさきのに不のうきをのいりよしてさまらひとたる世をたのむ

らん(同) 同千五百 番家長 「波の上にゆくへもしらぬうきを哉をたちにけを鳩のひを鳥

袖中抄ひける歌今本六帖三ハ鳩鳥のうきにいづととあり 補(月清) 「みさびるみぎの風にゆられきて鳩

のうきをたびねしてけり(壬二) 上 「みまのよ不のうきすもみたれあいの末

葉よか、ほさみたきのころ(續後拾) 雜中 「みたれあいのまさねにかよふ不とり

のうきをまひこを此よかりけれ(新續古) 雜上 資藤 「いとまを不とよかよふ池水の

鳩のうきをもかつてなりつ、にそのうみ鳩の(八雲)五名所あふみの海近江に

の海同にその水海源氏とあり(千)戀四上西門院兵衛「さぐ袖の涙やにそのうみからんかり

よも人をみるめかければ(新古)秋上家隆「鳩の海や月の光のうつろへば浪の花よも秋

ひみえけり補(續千)秋下前關白太政大臣「風さたるにその水うみをらされて月けきよ

沖つゝま山拾愚中「あとふかきさぐたつをまにとしふりてさぐをさすまその

みづうみ。よその海の事記傳三十一「廿丁考べにてててて鳩照。右の近江の湖よめりにそと

りのあふみのうみ(古事)中五迹本杼理能阿布美能宇美よ云々(永久)兼「鳩てるや

やんせのさとりする舟をいくをたびみつせとの橋守にててて海(新後拾)秋下前關

「山の名を分ていいと下月けの鳩てる海も鏡かりけりにててて沖(續後撰)秋中後

「から崎やにててて沖に雲消て月の氷よ秋風ぞふくにててて月(月清)「さぐの海

の汀わりり氷よてにててて月をよまる白波(同)「あふ坂れ山こえてて、さぐむ

まよよててる月の千里かりけりにててて露(拾玉)六「あつ野の尾花よ風にちり

やらでにててて露にそるかりけりにてててりまさる(新續古)秋上後「さぐ波やさ

がのうら風海ふけににててりまさる月のりけ哉にててて花雪をいへり(新後撰)冬師「よもすがらふりつむ雪の朝平

をらさる意あるべにててて花雪をいへり(新後撰)冬師「よもすがらふりつむ雪の朝平

らけ句のぬ花も梢よぞみる(新葉)冬後村「春もみいおさ下梢とかりよけり句のぬ

花の雪のあけ卒のにててて令句也是ハカチラ句にて句にせてと二様よいへりよりて思ふよ句の

ふべく又句の例よままひて句のい、ともいふべくにててて(源)源(さる)四

いと心してをらさき物心にくさほどよ句を(同)そ、む(二)そちをか

い得ろ、けてたき句のいたる是も物也あふとせて(後拾)春致「梅が、を櫻の花に句

いせて柳が枝にさりせていかなにててて是ハカチラとウツにててて(源)末つむ冊てづくら此あかさをりき

つけ句のい見給ふよ云々ににててて(源)末つむ冊てづくら此あかさをりき

い給のざりけるつらさを浅りらば聞え給ふ(同)あけまき(五)冊あまをづらに(同)く聞給

へどうつろふ方とあ句のいおきていけいと姫君のおが打ににてて(同)よこふ(五)

一まにのあらねど打句のい置て云々ににててて(源)末つむ冊てづくら此あかさをりき

い給のざりけるつらさを浅りらば聞え給ふ(同)あけまき(五)冊あまをづらに(同)く聞給

へどうつろふ方とあ句のいおきていけいと姫君のおが打ににてて(同)よこふ(五)

一まにのあらねど打句のい置て云々ににててて(源)末つむ冊てづくら此あかさをりき

い給のざりけるつらさを浅りらば聞え給ふ(同)あけまき(五)冊あまをづらに(同)く聞給

へどうつろふ方とあ句のいおきていけいと姫君のおが打ににてて(同)よこふ(五)

一まにのあらねど打句のい置て云々ににててて(源)末つむ冊てづくら此あかさをりき

のうらに句ふ藤浪今もさくら(拾玉) 五「あや先草軒よけふ見る夕ぐれよ句ふ栗
 五月雨のそら(千) 秋下崇徳院 「秋ふりきたそぐれ時の藤バクま句ふ名ものるこ、
 ちこそそれ(續古) 秋下白河院 「夕ぐれの風のふりぢの菊の花句ふまがきをいりせいら
 まし打に不ふ(源) うつせき 七いとかうバく打句ふま 云々 不へ(古) 上 「をりつ
 れは袖こそ句へ梅の花ありとやこ、に鶯のさく不へる(新勅) 春上 「山風よ香を
 とづねてや梅の花句へる里に鶯のさく不へぬ(拾玉) 二「梅の花うねて心よそむ
 ことや句へぬさきの色とあるらん不へおこせ(拾) 雜六贈太政大臣 「こちふりバ句ひお
 こせよ梅の花あるトあしとて春をささる香に句ふ(古) 春上 「人いさ心もあら
 せ故郷の花ぞむりりのりよ句ひける不ふり(風雅) 春上 「よほふりのるべあ
 らせハ梅の花くらぶの山よをりまとまま不ひかをれる 句薫れ (赤染集) 「よそ
 へてもみまく不しきをさるかけてまちこ梅のよ不ひりをれる不ひ 詞 (壬生)
 上「うつもる、軒端の梅や咲ぬらん句ひよささる雪の下風(金) 春越 「あし垣の外と
 へこれと藤の花句ひへこれをへたてざりけり(壬生) 上「あや先草沼の岩垣風こえて
 句ひぞ袖よまづか、りける(拾玉) 五「いのりえてうれしき雨のぬれ色よ句をそふ
 る軒の橘(新千) 夏定 「忍ふべき世々のかこまのこ置て句ひへふりぬ軒の橘(拾

愚) 上「秋ふりき岸の白菊風ふけバ句ひへそらの物よぞあける(源) 一ひめ 卅いと
 むくつけき迄人のおどろく句ひを失ひてまやと思へど所せき人の御うつりがよて
 (狭衣) 三下、四 神殿の内 云々 いひいらせかうもしき句ひよのつ糸の限りにあらは
 さとくゆりさるに(同) 四下、五 さにやとおゆる御句ひの打かをりたるも 云々
 不ふ 句。是ハツヤの意也うつく艶あるをいへり契 (万) 十四 「妹が袖巻來
 沖云遊仙窟并万葉集に艶の字とに不ふとよめり
 の山の朝露に句ふ紅葉のちらまくもを(風雅) 釋教 「名よめで、まよひもぞさる
 女郎花句ふ宿をばよぎてゆかかん補(万) 一、廿 「ひくまのに不ふそり原入みさり
 ころもよ不させたびのるに(同) 九、十 「たくひれのさきさき山白つ、ト吾よ
 不はね妹よしめさん(同) 九、卅 「玉津島磯のうらまのまかであもに不ひてゆりか
 妹よふれけむ(拾玉) 二「はまがまのあたりの空とかがむれそりけふりもあ不
 ひきあけりに不へる(万) 一、十 「紫の句へる妹をにく、あらは人づま故よこれこひ
 先やも(同) 四、十 「朝日けけよ不へる山よてる月のありさる君を山でよおきて(夫
 十五) 「まきもくのあま川風よぎてふけ句へるもとち今さりりありに不ひ(万) 十三、十四
 「つまかくはやの、神山露霜よ句ひ始 ソメダ ちらまくをしも(源) さうき 廿まとのあつり
 けよ句ひ給へるさま(貫之) 廿 (六帖) 上 「ゆりとも聞えぬ物と山吹の蛙う聲よ

句ひける哉蛙の聲故又山吹も一 **に不ひ** 語の (枕) 三、二梨の せめて見れハ花びら

のそしあをりしき句ひこそ心もとなくつきためれ 軍物語は鎧の色をど (源 楨柱) 九

とをおかしことかつけは中よごとのさまも句ひことよらうくしうをあい給

ひて(同) うめうえ 三故入道の官の御手いといけしきふりうをまめきたる筋あり

しりどよごき所ありて句ひぞそくかりり(同) 空せき 五いよくしをこりりに打と

けて笑ひかどそするれを句ひおそくええてさるうさよいとをりしき人さまあり

(同) 玉うつら 卅さりりよきよらに結びまさり給へりいこしをどへて見奉るは又此

不さじこそ句ひくひり給ひあけれとみえ給ふ(同) 夕きり 四あさやりし物きよ

けよごりうさりりに句をちらし給へり(同) 胡蝶 廿中將のさらむりしさまの句ひ

ともえぬからひよ(同) あけまさ 八十九中の 君の事を 今をこしこめきけさうくおそれる物

ららあつりしう句ひある心さまぞ 大君よ おとり給へりけると 云々 聲のに不ひ

(玉) 夏二品法 「過ぬとも聲の句ひハ猶とめよ郭公かく宿の橘 是ハカタリとツヤ (拾)

物「あご人のまがれちうろあ花うゑを句もあへせ折つくしけり(續拾) 秋上 「心あり

て露やおくらんのへよりも句ひぞまさる秋萩の花 此二つもエンカ **に不はし** いさ

(源 桐つ不) 廿名たりうおそれる官の御りちあも猶句ひしさいたとへん方かくう

つくしけあるを **句もしき** (源 空蟬) 五鼻かどもあさやりある所かうねひれて句ひ

き所もええ **句もしき** ともいふべ

に不ふ 櫻よハかをるとつや **花のう** **花の句ひ** 香也共よ **は** の部よ こ、よハ初よかを

さてつやめく意 (六帖) 上 「句ふより心あたかる花故よのどけき春の風もうらえ

(千) 春上崇 「たづねつる花のあさりにかりよけり句ふよるし春の山風(同) 同、道

「小夜ふけて風やふくらん花の香の句ふこ、ちのそらよする哉 **に不ひ** (拾玉) 五神主

「神風もさを忍ふらんいく春も句ひおこせよ志賀の花園(新千) 春下、二品法 「霞たつ

峯よも尾あも山櫻句ひへたてぬ春風ぞふく **に不ひ** 詞の (壬生) 上 「雪ふれど忘きぬ

物ハ春風の句ひをさけし志賀の山こえ(續千) 春下、 「ちるぞこそうしともかこてさ

く花の句ひいさそへ春の山風(續後撰) 神祇、後 「いよへの鶴の林にちる花の句ひ

をよめる志賀の浦風(新後拾) 春下、 「よ一の山花の下ふし日數へて句ひぞふりき袖

の春風(續千) 釋教、順 「雲とみて過てし跡の山櫻句ひあ今ぞ花としりぬる 是もかとり

あ不ふ 此下あるハツヤ (後撰) 春中、衛門の 「山里あちりあましは櫻花句ふさりり

もたられざらま(壬生) 中 「山の端も夕日のどけき白雲の句ふハ春の花さかりかも

あ不ひ (古) 物名、紀の 「山高み常ああらしのふく里ハ句ひもあへせ花ぞちりける

(後撰) 春下、「風あしも何りまらせん櫻花句ひありぬふちるのうかりき此後撰のも猶ツヤメツ

意ある(新葉) 春下前内大臣「朝日さす峯の霞のたえ間より句ひをへたる山さくら哉に不ひ

体の語(散木) 上十「九重よ立ちさなりて春霞風よかみせを花の句ひをに不ひ

ひよへからひ給ふべくもあらさりけれも同七繪よりける楊貴妃のかさち云々

筆限りありけれもいと句ひか同三参り給へと此君よ似る句ひ

かく見ゆ同十故權大納言何の折々にをさきまつけて云々物の折ふの

句ひうせたる心ちこそはれ同七人とありゆくよひよそへてつかさ位世中

の句ひも何とも覺えぞかんとたうづやりある御さまひかぞの心よりかひ給へ

りしを云々(六帖)下「此ふるの梅の花かり冬かり君り句ひよ春へ來あけり拾

正月の人々まうて來りけるに又の日のあしよ右衛門督公任朝臣のもとにつり

しける具平「ありざりし君が句ひの戀しよ梅の花をぞけさゆせりつる(後拾)

大皇太后宮東三條あて后あた、せ給ひけるお家の紅梅をうつしうゑられて花のさ

りり忍忍ひあまりりていとおもいろくさきさる枝あむはびつけ侍りける弁乳「かば

りりれ句ひかりとも梅は花賤は垣根を思ひこはるな六帖以下の常の句あ不ふ

用の語に句ひ出(源)よもさふ廿こまやうおおぞしおきてたるお句ひ出て宮内や

うく人めとえ木草のともたをそくあはれよ見えかされしをやり水かきならひ

云々句ひくる(同)をどめ二十かづりれ給へる御をくせをぞが家迄は句ひこね

どめいぞくよおぞま云々

よほひが句香。香お句ふといへるに(後撰)春上、そ「梅の花をれはこぞれぬとが

袖お句ひりうつせ家づとよせん(六帖)上六「鶯いよくかなきを句ひりよめで、と

がつむ花からなくよ(射つね集)にう(源)竹川九打ふるまひ給へる句ひがあとよの

つねから補(續古)勢「おをひいで、見よこざりせまうめのをかされよは不ひの

香をうつさま(輔親)「お不ひがは君あまはべきあらねども折てぞ見はるやその

う光がえに不やう次のに不ひやのよ同(枕)十二加持そに不やうあるとこを獨結

とらせて(抄)つやめ(文選)魏都是のをる

に不ひやう句ひ。ツヤしどらつくしき意の句ひにてやかの花や(うつすくら開)

上一。子らと給へる。ことよそこかかれ給はせをこし青と給へれどいとあてよけさ

りくさをがお句ひやうよおしよ(源)桐つや六いと句ひやうようつくしけある

人のいさうおもやせて(同)末つむ五卅口お不ひのそをめより猶かの末つむ花いと句

ひやりあさし出さり(同 橋姫)廿さいのぞ
ささる顔いとくらくらうさけお句ひやりあるべし(源 九まつ)
此姫君の御さまの句ひやりけさをおぞし出られて 云々

にへ(贅 冊三)「さむくべき神のよへとを事よせておまへのかいらやあうちてけり
にへ(贅 光俊)

補(万代)前參議俊兼「あられふる玉の、原あまよりしてあまのひつきのよへ奉るにへせ
にへ

(万)九十四「鳩鳥のうつりせせをよへまともそのかあしきをとあてめやも(袖中抄)六十田舎に始めて早稲を刈て物して里隣の者集りてくふをばよへまともと云也

(万畧解)早稲を以神は新嘗祭る也公のもとよりよて田舎の民戸よても此祭せしあ
るべしにへのそつ刈上同(散木)八下「こりてぬよへの初かり朝よる家よもあら

で人かへしけり(袖中抄)六十贅といふにくひ物よつきさる名也公は奉る物をも御贅
といふ又私おくひ物をる所をも贅殿といふ但よへん多く魚事よりさる名をめ

り魚いれたる桶を贅桶と云よへどのといふもあるあはせをどる所也いひる
所をバ大炊どのとこそ申めれさあれとくひ物よことを似され其よへよかよ

んもさぐふべりらる 云々 ねへのどの(延喜式)冊一十三諸國所進御贅 云々 並取贅殿(宇

治拾)七二鯛のあらまきを 云々 ねへのどのよもて参りたりこ、左京の補(同)七一よへど
かまの家也

のよるさるやとよ(うつ) 國護下冊をさめ殿にへ殿いととりくたものあとにへびと
魚鳥魚鳥

魚鳥などとりて御贅(神樂歌)「こも枕たりせの淀にやたぐにへびとぞ鶯つきのほる
よ奉る人をいふとぞ

網おろしさをさし(の)おろし(の)にへ(夫)十八三鳥社奉り「さし(の)に神
の御鷹を引を急てからぬ日もあしおろし(の)にへ(い)にへ(い)の部(の)にへ(い)

その部もぞのそやにへ(の)の部

補にぬり 丹塗(万)九十さいぬりの大橋の上ゆ(同)八廿さいぬりの小ふねをまけ
にる 養(宇治拾)十三三三尺をりりる鯨の 云々 つぶくときり入て養てくひて

にる 養(宇治拾)十六三三尺をりりる鯨の 云々 つぶくときり入て養てくひて
云々

にる (新拾) い仲文「しら雪のふれるあしこの白かゆいといよくにさる物よ
をありけるにさを令養也(うつ) 院八火を山のとくおこして大いあるかあ

へさて、栗を手でとにやきて粥よにさせ(附)にゆる(宇治拾)六三「むろよりあ
みど佛のちりひよてにゆる物をバそくふとぞ(附)にゆる(宇治拾)六三「むろよりあ

るおもひのさけゆまかへるくもよゆるかあしき
にる 似。似と養と動りいへる詞大方同其中に似にそ養ににさせ
といへり、似ににせらる養ににらる又にやそあといふべくや(いせ物)段四こ

ぞににるべくもあらず(源 八)八一りきたる女子あまよえつる子ともに似る
べうもあらず(同 少女)冊二二さまよ参り給へと此君ににる句ひかくとゆにる時あし

にる

にる

にる

にる

にる

にる

にる

にる

にる

にる

にる

御堂か、る事不承として御指貫の左右を取て不着普羅下て人の門の唐居敷し令立給ひよりければ帥殿ににがりて御座けり(十訓抄)七、廿おのれがやうある侍などいひければこそるされ公達の物仲せらる、にいらへせるやうやあるあらびんかといひければも明兼にがりけり事にがり事がらあしく不興ある意也(著聞)六、此僧正の筆業にくと給ふ人ありあられ用枝ののるべりらむ事まがりあんぎとてのせざりければ云々

にがごらふ にが 俗と同じ体の詞に にが 笑ひともいふべくや にが 笑ひて(盛衰) 三八段清もりによそへたる平家の一類もつての外おにが笑ひてぞみえよける(同) 判官をあざめる所よ判官にが笑う便也 ひの音でぞかへりける

にがむ 俗の 若い顔するといへるに にがむ (大鏡) 七むろいおそろりりける事どもなど申させ給へるにこよひこそいとむづろいげある夜なめれ云々まいて物とされたる所おといりあらんさらん所まひとりいあんやと仰せられけるに云々今二所もにがむいとおもさういぬ にがむ (うつ) 櫻の王 下六十八、藏人のあひさ又

女の方に御使の藏人おせとて云々袖口長やりよさし出てかいらけさし出さる見るにいよいといとびう心ちあいうなりていりま仕らんとてにがむととみよもたらぬバ云々(源)と、き、三冊おとむもこり給ひて打とけ給へきバ御几帳へたて、

おのいまして御物語聞え給ふを源あつきにとにがみ給へむ敬語 にがめ バ といふ (狭) 三下、四十一、ふけゆくま、に雪折々ふりつ、風あらう吹きさる庭火もいさうまよひて吹りけらる、をもらひとびつ、煙の中よりにがみ出さる殿もりづりさのもの、顔ども云々 にがむ か、る (同) 三上、母代今姫君額髪をかきあけて

にがむ か、る 顔けいさや、もせべくひりきぬべし にがむ (盛衰) 廿山門の詮義と申事異なるやうに侍り歌詠せる聲にもあらむ経論ととく聲もあらむ又さし向ひ言談せる体をもとされり先王の舞をまふあるに面摸の下に鼻をにがむる

事侍るあり(字鏡) 不正也 にが 苦 五味の き (宇治拾) 三、廿七、ひさ にが き 事物にも似せきいたかどのやうよて心ちまどふ云々

にがむ の 所に附す 事にがくある 是の前の にが 大鏡 七 き よう よう も て も や 聞えさせ給へる興もさえて事にがくありぬ

によい 如意 (和名) 十三、四、梁劉孺有如意銘 によい 如意 (枕) 九、十、佛によいりの人の心をおそしとづらひてつら杖をつきておのる世よりらむあられよとづり

によまん 女人。たゞ女をさしていへる也、僧(うつろ 祭の使)卅帥やもめにも侍るつか

さかうふりもこもてり何事をり、女人のきらひむべきにあらしめぞや(同)同さ

らばたれり女人らにめていむる(源 夕きり)廿阿闍梨詞 女人のあしき身をうけ長夜のや

とまどふ(同)てならひ)五十四 其女人此とびまうり出侍りつるたよりよ 云々

によふ 如法。うさのごとく又もとよりイフ迄モナキの意也、盛(賢愚經)羨那歡喜即

以香花妓樂供養畢竟共至會所佛至其舍如法就坐 云々(山槐記)四 治承三年十一月十

五日己巳天晴中宮大進基親送事於少將昌宗許云來十七日中宮可有行啓八條殿

如法午刻可獻出車者申承之由(吉御記)承安四年九月廿五日 云々 於藤代王子行里

神樂給白米又給碗飯一具(和泉家憲)如法行之於寶前信心殊凝感應之甚也(建曆二

年三月廿二日宣旨)一可如法勸行諸社祭祀神事等事(沙石集)彌勒の行者よて内院

の上生をぬがひ如法修行の上人ありけり(同)又鈴の印をむそびてふるよ如法あり

がさき鈴の音けり(保元物語)上七 新院は十一日の如法夜更て田中殿より白河の

前齋院御所へ御幸おほ(盛衰)六廿 如法夜中の事おれどもこれさきよとぞせ参り

ける(同)八十九 如法曉の事おれば旅人もいまたとえざりけるに(同)廿七 如法夜半の

事あるよ俄し時をつくりけり(同)廿二 如法夜半のことおれば關守ぬふりて

おどろりぞ(同)四十二 如法おびさき大風おれを船を出る者かりけるに(同)

五十八 文覺紙を取むけて見れば如法雜紙かり見るま、よ奇怪なる奴原が紙の様哉

(同)廿五 公藤介茂光の如法こえふとりたる男あり(前大平記)七 てるの所の多く

武士さちの御下向よて候故何をがかと存せれども如法卑陋の海邊おればさせるま

うけもかく候(同)一多勢を引受戦ひける如法力量打物の三道よからびかき手利を

によまん 女人。たゞ女をさしていへる也、僧(うつろ 祭の使)卅帥やもめにも侍るつか

さかうふりもこもてり何事をり、女人のきらひむべきにあらしめぞや(同)同さ

らばたれり女人らにめていむる(源 夕きり)廿阿闍梨詞 女人のあしき身をうけ長夜のや

とまどふ(同)てならひ)五十四 其女人此とびまうり出侍りつるたよりよ 云々

によふ 如法。うさのごとく又もとよりイフ迄モナキの意也、盛(賢愚經)羨那歡喜即

以香花妓樂供養畢竟共至會所佛至其舍如法就坐 云々(山槐記)四 治承三年十一月十

五日己巳天晴中宮大進基親送事於少將昌宗許云來十七日中宮可有行啓八條殿

如法午刻可獻出車者申承之由(吉御記)承安四年九月廿五日 云々 於藤代王子行里

神樂給白米又給碗飯一具(和泉家憲)如法行之於寶前信心殊凝感應之甚也(建曆二

年三月廿二日宣旨)一可如法勸行諸社祭祀神事等事(沙石集)彌勒の行者よて内院

の上生をぬがひ如法修行の上人ありけり(同)又鈴の印をむそびてふるよ如法あり

がさき鈴の音けり(保元物語)上七 新院は十一日の如法夜更て田中殿より白河の

前齋院御所へ御幸おほ(盛衰)六廿 如法夜中の事おれどもこれさきよとぞせ参り

ける(同)八十九 如法曉の事おれば旅人もいまたとえざりけるに(同)廿七 如法夜半の

事あるよ俄し時をつくりけり(同)廿二 如法夜半のことおれば關守ぬふりて

おどろりぞ(同)四十二 如法おびさき大風おれを船を出る者かりけるに(同)

五十八 文覺紙を取むけて見れば如法雜紙かり見るま、よ奇怪なる奴原が紙の様哉

(同)廿五 公藤介茂光の如法こえふとりたる男あり(前大平記)七 てるの所の多く

武士さちの御下向よて候故何をがかと存せれども如法卑陋の海邊おればさせるま

うけもかく候(同)一多勢を引受戦ひける如法力量打物の三道よからびかき手利を

によまん 女人。たゞ女をさしていへる也、僧(うつろ 祭の使)卅帥やもめにも侍るつか

さかうふりもこもてり何事をり、女人のきらひむべきにあらしめぞや(同)同さ

らばたれり女人らにめていむる(源 夕きり)廿阿闍梨詞 女人のあしき身をうけ長夜のや

とまどふ(同)てならひ)五十四 其女人此とびまうり出侍りつるたよりよ 云々

によふ 如法。うさのごとく又もとよりイフ迄モナキの意也、盛(賢愚經)羨那歡喜即

以香花妓樂供養畢竟共至會所佛至其舍如法就坐 云々(山槐記)四 治承三年十一月十

五日己巳天晴中宮大進基親送事於少將昌宗許云來十七日中宮可有行啓八條殿

如法午刻可獻出車者申承之由(吉御記)承安四年九月廿五日 云々 於藤代王子行里

神樂給白米又給碗飯一具(和泉家憲)如法行之於寶前信心殊凝感應之甚也(建曆二

年三月廿二日宣旨)一可如法勸行諸社祭祀神事等事(沙石集)彌勒の行者よて内院

の上生をぬがひ如法修行の上人ありけり(同)又鈴の印をむそびてふるよ如法あり

がさき鈴の音けり(保元物語)上七 新院は十一日の如法夜更て田中殿より白河の

前齋院御所へ御幸おほ(盛衰)六廿 如法夜中の事おれどもこれさきよとぞせ参り

ける(同)八十九 如法曉の事おれば旅人もいまたとえざりけるに(同)廿七 如法夜半の

事あるよ俄し時をつくりけり(同)廿二 如法夜半のことおれば關守ぬふりて

おどろりぞ(同)四十二 如法おびさき大風おれを船を出る者かりけるに(同)

五十八 文覺紙を取むけて見れば如法雜紙かり見るま、よ奇怪なる奴原が紙の様哉

(同)廿五 公藤介茂光の如法こえふとりたる男あり(前大平記)七 てるの所の多く

武士さちの御下向よて候故何をがかと存せれども如法卑陋の海邊おればさせるま

うけもかく候(同)一多勢を引受戦ひける如法力量打物の三道よからびかき手利を

増補御言集 卷之廿

にようるん 女院。國母(百鍊抄)十二 正曆二年九月十六日皇太后依御惱於式曹司
出家即號東三條院(天皇行幸)女院記東三條院詮子圓融院后一條院御母(枕)八、廿
さらせぬ女院宮さらかどの屋あまゝあるに

にようくさん 女官(禁秘抄)下、女官、臺所、女官御裝束沙汰(云々)御湯殿女官奉(公物)
也(源)まさとしら(四)内侍所にも事おろりる頃よて女官ども内侍ども参りつ、

(同)やとりき(三)大方さるまどきまその女官などまて恐び聞えぬのあ(枕)廿、
いり
で女官かどのやうにつきをまてのあらん(同)六、かいらる物、女官どもの髪あ
けたるをがと(同)九、御かうしも参らせ女官参りてこれまかせ給へといふを女房
聞てまかつを(云々)

にようで 女御。(花鳥后)つ(雄畧紀)十使欲自求稚媛爲女御(源)きりつ(初)女御更
衣あまゝさふらひ給ひれる中(同)三 右大臣の女御の(榮)月のえん(九)九條殿の女御
右大臣又九條殿の(同)麗景殿の女御(同)宣耀殿の女御と聞えさせ(同)花山(梅)つ
御娘の女御をいふ(同)又さ(源)桐(弘)徽殿よ(同)藤壺と聞ゆ(あ)ど殿の名の
の女御(そ)べておとし(又)さ(源)桐(弘)徽殿よ(同)藤壺と聞ゆ(あ)ど殿の名の
(同)一のこの女御(一)のここを生(奉) (同)春宮の女御の(上)ふ(に)ようでの君(源)
と(う)ち(五)八十 女御の君も

にようでの 女御(源)一(ひめ)四 冷泉院の女御殿の御方かどこそ(清慎公集)女
御殿御消息聞え給ひてを(云々)にようでの殿(清慎公集)女御の殿をのこ(不)そちを
長ひつよいれておろせ給へるを(共)あ(女)御を
にようでたい 女御。女御あき時に女御をかこり(かけろふ日記)上下、た、ん月、
代。て召さる(い)ふ也とぞ(狭)即位の時、京に、大嘗會かど近
大嘗會の御けいこれより女御御代出さるへ(狭)即位の時、京に、大嘗會かど近
うかりぬれ、源氏の宮の女御代(給)ひてやがて参り給ふべ(と)あるを
にようでや 女御屋(榮)さま(八)麗景殿に(ま)せ給ふ(云々)やがて御てぐるま女
御やかどあべき限りいと物々(う)おほ(か)いづき奉り給ふも
によふ 俗のウナリ(竹とり)によふ(に)か(に)れて(に)よふ聲(宇治拾)六、十あるひに
志にあるひに(よ)ふ聲を(同)十三人のうめく聲を(云々)大(あ)や(く)て又(こ)と所をき
け(れ)な(と)く(よ)ふ聲を(に)よ(ひ)ふ(つ)れ(八)十具覺坊(く)ち(あ)原(よ)に(よ)ひ
ふ(と)る(を) (同)六、廿あくる日迄(か)いら(い)さく物(く)ので(に)よ(ひ)ふ(補) (平家物語)大
き(さ)る聲(し)て(よ)え(ひ)けれ(バ)云々(加茂保憲女集)つね(よ)に(よ)ひ(け)り
に(よ)て(い) 女帝(盛衰)二、四 皇后女帝として(云々) 呻吟

にれ(和名)十八、廿 貽爾雅集注云獸吞莠噉反出而嚼牛(日)貽羊(日)齧麋鹿(日)齧(已)上三
字皆通

會補雅集注 卷之廿 十七

無介加(つれく)二百章兼が牛を連れて云々これ打かきてふりさり。にけりむと同
に(つちう)日中(源タタリ)八ひるつり日中の御りちえて、あざりひとりともまり
て猶陀羅尼よと給ふ(枕)六廿あつけある物、六七月の修法のあざり日中の時と行
ふ(抄)六時行ふ日中也

に(つたう)入唐(後拾)別入唐侍りける道より源心がもとに云々

に(つそく)日(拾遺)雜戀日逢事の斯てやつひよその夜の思ひも出ぬ人のためり
に(つく)似付(万)四五「いつもりも似付てぞをろうつしくもまこととぎもこれ

よこひめやに(つりそ)意(土左日記)めのさらん歌云々いふりひなきもの、いへる
に(い)とよつり(同)からの歌とも時よに(つり)をいふ(う

つ祭の使廿八、只今殿は北方もおひまさき一所かと聞えさせしりバけよ似つり
に(い)き事よあんなれと云々に(つり)末つじ三姫君のとありさまもに(つ

うに(い)くよしめきかともあらぬをよ(つり)からめ(う)つ布(霜の宴)七此きんたち
のさふらひ給はんこそ似つり(同)からめ里ぢみ給はんひんかうこそあら先

よ(つり)からぬ(源紅葉の賀)廿三源内侍の所よ似つり(同)からぬ扇のさま哉と見給ひて
よ(つり)からぬ(同)あけまさ廿二に(つり)からぬ事を聞えしらせれと

に(な)ふ(荷)に(か)ひ(万)十八「常の戀いまさやまぬ都より馬にこひこばよかひあへ
んりも(古)か「人こふる事をおもはまにかひもあふさきこそびりりけ

れ(補)拾玉四「よかひものさうきのいれと町足駄よを行道のものとして見れ(金葉
「のりのさめよかふ薪よことよせてやがてうき世をこほぞもてぬるに(か)ひて(孝徳

紀)八其葬時帷帳等用白布擔而行之(宇治拾)二、卅をまひの死いたりければ物よ
かき入れてに(か)ひてもてゆきけりに(か)ひたる(夫)十八、たきに(か)ひたるものども

あま山をこゆ(小弁歌)に(か)ひいたく(蜻蛉日記)六、廿不まなどそる不どに(か)りよ
けを見ればあやしさまよに(か)ひいたき云々に(な)ひあぐ(同)十九、岸のいと高き

所よ舟をよせてさりかくさあけよに(か)ひあぐ(落く)二、車と堀よかよに(か)ひあ
けて繩もとめてきてゆひかとしてに(か)へる(盛衰)卅三、手よもち肩よに(か)へる物

をもおさへとりければに(か)もる也(竹とり)によふに(か)はれてに(か)ひいさ
是ハエイヤットよ(土左日記)此海べあてに(か)ひ出せる歌

に(か)き(無)二(大和物語)注二の長頭丸云方便品に無二無三とある字也。案するよ(史記
韓信傳)功無二於天下と見え(源)卅に(か)く一本又あふとつかきと同意也。案と

るよ(六帖)のに(か)きよめりよげあきの誤りなるべしに(か)き人(いせ物)九十むか

一男身のいやしくていとにかき人を思ひかけたりけりにかき所(うつろ吹上)三いと
となき所ありけりいりてかくてむらんと御覽にかき車(同樓の上)上五糸毛
のにかき御車にかき紙(源繪合)八又かきさまある繪ともをにかき紙ともにかきあ
つめさせ給ふにかきひき物(同椎本)にかきひき物ともをにかく(うつろくら開)九
聲々あまこの物吹合せていとにかくあそびせ給ふを(同)四十のり弓のせちま云々
まうけはにかくせられされ源繪合七あのにかくか、せ給ふ(同)夕さり四都あ
にかくとつくしたる家居あつ猶衰と興もまさりてぞ見ゆるや(大和物)三云々とよ
めりければいとにかくめせ給ひけり(同)酔ひかきいとにかく源若紫六心が
まへもにかくいさりけりにかう(大和物)二のうさんの君といひける人淨藏とい
とにかう思ひかへ中ありけり(同)三平仲色このと、りてにかうけさうけり
(同)五世あかくかこりりければにかう覺て御手鷹に給ひけり(源旗一)二
儀式いとにかくもてかづき給ふ

にらむにらむ(遊仙)斜眼斜眼頃日(源あう)七御けいさいとあううてにらむ聞えさ
せ給ふを云々にらむ給ひに目見合せ給ふと見いけあや補(著聞)十六にらみま
いてお不行を(同)十六お不行とあおもひてにらみければ(同)看病のものどもをこ

かまらみけりにらみあぐ(宇治拾)十二赤きまをこある目のゆ、くあけある
ておらみあけたりけれにらまへ(平家)六大のまをこを見いからり前座主を
ばにらまへ奉りてにらまを(新猿樂記)忿怒、面似惡鬼之睡眠にらむ

にん任さきのにんににんて、(後撰)三みちの國のかみまより下れりけるに
云々任せて、後又同國まよりなりてかのさきの任にうゑ松を見侍りて(後拾)
四雜舉周和泉の任せて、罷りのづるま、に云々(源玉つら)六少貳任せて、のづり
なんとをるににんに(續後撰)夏みちのくにの任よ侍りける頃云々實方(宇治拾)一
能登の國よ云々實房といふかみの任よ云々にんての年(同)十四今むり
貫之が土佐のかみまかりて下りてありけるなど任せての年云々

にんにく忍辱(瑜珈論)何等爲二因縁一忍辱二柔和言忍辱者謂於他怨終無返報
柔和者謂心無憤性不惱他(うつろと)七あられの忍にくの心を思ふともがら
にあらせ(盛衰)卅四悲いりあや邪見の毒の矢にんあくの衣をやぶる事云々

にんぢやう人長(枕)六こ、ちよけある物、神樂のにんぢやう抄神樂の舞人倍従あ
どの長也補(著聞)七人長兼時能通を見てければ云々(同)六卅云々庭火の本哥をと
なへけるよ秦兼弘人長よて

にんぶ 八夫 (宇治拾) 九 十 慈惠僧正の 云々 叡山の戒壇を人夫かかひざりければえつ
りざりけるころ 云々

にんせ 妊ト孕め (うつせ 院) 七十ひるも時々とらせ給ふ不どに
事ありとぞ

十月ばかりよりみんと給ひぬ父官をこしうれしとおぞを (同 くら開) 七此み妹こそ
時々見奉りてみんとて待る

にのまち 二の 局町より轉トて万 (源 帚木) 四 これの二の町の心やまきさるべし
次なる事いへり

あのみひ 二の 舞より出さる詞トて何トても人に (狭) ひける所よ 雲井をるりよ
舞。さしつゞきておなト事するをいふ

ひゞきのぞるこ、ちるるを隠簾の中納言の二の舞よやあらんとむづりければ撥
ついで給へるを人々も官もありおぞめしり (榮 衣の珠) 卅 されど覺さる、

やうあしを心をもめんと思ひて月日をいぐし侍る不どおせんせられ奉り侍
りぬれも今の二の舞あて人の御まねをさるおかりぬべきがいとくちをいさかり

(大鏡) 二の舞の翁トてこそ侍らめ

あのみと 二の (江談抄) 一 一人有障不參之時二 人必被參詣 (榮 月の宴) 八 世の中
の事を實頼の左大臣つらうまつり給ふ九條殿二の人トておはすれと

あぐ 逃 逃げ 宇治拾 十九 此あひどよく逃げあぐべきあり 源 玉

つら 三かくてよぐるおかりけり 逃げん (宇治拾) 二 廿 されひとりおげんと思ひて 云々

にげ 逃げ 古 ありなくよまたきも月のかくる、山の端にげていれせ
もあらかん (竹とり) にげて入る袖をとらへ給へ (枕) 三 十にげていよけるもいら

せ補 (六帖) 友 一 八月を山のもよけていれせとも人のこ、ろをいりたのまん 伊勢
古意五十二 (後撰) 一 小山田のおどろりよもこざりしをいとひたふるよにけし
君りな (拾玉) 四 一 うていよぐにけてもをりむ心より人をかるめぬ名をぞとむる

にけにけり (源 竹川) 三 夜ふけよけりとしてにけよけり 逃げん 逃げしる (宇治拾)
十一にけんと思ひて 云々 人めをさりてにけはしる 逃げつる (同) いくし思ひて

にけつるぞと問へば 逃げのぞる (雄略紀) 九 廿 尼尊能褒利志 逃げさる (神代紀) 卅
無所逃去 逃げかくる (うつせ 俊蔭) ありきからひてにけかくれんと思ふものを

めり (源 帚木) 二 二にけりくられてよけのく (宇治拾) 九 十六 佛師よけのきて 云々 附 よがせ
(盛衰) 卅 四 其やつよがせかとしてさんどいけれバ 云々 よがし (源 若むらさた) 九

雀の子をいぬきがよがしつる (金葉) 上 壁のくづれよりくづりてよがしやりて又の
日そのよがしたる局のぬしの云々 よがさし (宇治拾) 三 廿 今よぐともよもよがさし

よくがる よくむの所よ附よよくるる よく、ある 約也 よくし 約也 所よ出せ

源氏物語 卷之七

よくりらぢ俗もカハユキ事をニ源と、さ、十うらむべりらんふしをもよくか
らせのそめかさバ同五舟わりき聲どもよくりらぢ同東屋十君をこしひかひてあ
るとの聞給へどよくりらぢ打ゑみて聞る給へり枕四男君もあくりらぢあいきや
うづきてあくりらぬ六帖五「あくりらぬ人のきまあるぬれぎぬいとひがさく
もおもすゆる哉あくりらぬ源神八舟あぢがちよ忍びりき給へらん御心をへもよ
くりらぬバ

にぐら荷の所又出せ

にくらかシキ意也源上七御方の御心おきての云々さるべき方おのひけい
てにくらけらけらけらぬなどをすめぬ人を

にくむかるくにくむと俗のイヤニ思ふ意源と、さ、七こと人のいんやうに仰
せらるゝとて中將にくむ宇治拾三廿と一の老て雀かえるゝとておくみおらふ

にくむ源末つひ八人の思ひよらぬ事よとにくむこれらにかる同東八廿
のさちも心さまめえにくむまどうらうたけありにくみて枕四廿二食のふしを

がみて肩にぞ打ちけてまふ物うはことにおくみて皆入りこれらイヤニ源死り
つや九これあつけてもにくみ給ふ人々おすあり同廿今のされもくえにくみ

給ハト敬語おにくまらといふべしこれにくまる同うつせミ初これのかく人よに

くまれてもあらぬをキヲハル此以下の皆常犬和物二さくやうをして親よ
もさらからよよくまれければにくまバ盛衰三十龍神もいが國をよくまバ

にくまぬ平治物中にくまぬものぞかりける附にぐらる宇治拾七笑ふもの
もありにくぐるものも多りにくがり枕四卅雪山人のにくがりてとりそて侍
るよや

補 にくいけ隆信おもひけぢよくいけあり一人を

補 にく著聞九十六よく返事ければ

にくさけ俗と枕四あぢきかさ物とり子の顔にくさけある大和物六いとにく
さけある女子のあるを

にくさひ能因歌枕にくささミどの舟に綱つけるをい八雲三下舟具の所にくさひ
舟よりくる物也色葉集にくさいあ舟よかく物也今案をるよかあも未

詳いうある物小町集五十一こぎさぬやあまの本の風間もまたいてにくさひかけ
るあまのつり舟夫廿五能一にくさひぞかくべりりける難波り舟うつ波いこ

そねられ住吉物語沖よりこぎくる舟にあやしき聲にてにくさいりけるをと
うこふもささがよをりかりける

新編 源氏物語 卷之七

輕重ある事前の(源 タウヤ)六にくくとこそ思ひたれか(同 てあらひ)四狐の

變化しさるるに(見あらわさんとて)同(うつせき)九にくいと(あけれど御心とま

るべき故もあきこ、ちいて)にくき(同 と、き)八心もけいうのあらを侍りうと

た、此にくき方一つかん心をさめを侍り(枕)五にくき物、いそぐ事ある折、長で

とをるまらうと云々)にくけ(源 と、き)八せうとの顔にくけ(同 めゆき)八廿る

さりしぞきて見おこせ給ふよくけもあけれどいと腹あけまどりひきあけさり

(枕)五三重がさねの扇、五重のあまりあつくかりてもとあどにくけあり)にくけあ

ること(源 と、き)九腹ささくかりてにくけあること、もをいひさけま侍る

に事よも言よ)にくけでと(枕)二、十二にた、あるさあいと、も思ハ、からぬ人の

あくげでとさるべし)言ある)あく、(万)四、十一紫の匂へる妹を爾苦久あら(源 明石)十

おろりからせおがをさめりりくとあく、ぞ思ふ(拾)物名と「山高と花の色をも見る

べきまあく、さちぬる春霞哉)にくけれ(源 東や)七折ふの心をへのかやうああい

きやうかく用意あき事こそあくけれ)にくさ(落く)二あくさあかふりをあん打お

として(源 桐壺)廿六打をへてもとよりのあくさも立出て物とおぞたり)あくりる

(蜻蛉日記)六上下)にくりるべきものよて、年へぬるを)あかにく(源 よもきふ)九更

よろけひき給いねばあかにくことト、

にくい(俗と)同(方)に添へて)いひにくい(枕)十五いひにくき物、人のせうそこお

せでとあどのおりるをついでのまま、にせどめよりおく迄といひにくい)にくき

(着)にくき(枕)三、三月つるもり頃冬の直衣のきにくきにやあらん)立をなきにくき

(源 さりつや)十)艸むらの虫の聲、もよそ顔あるもいと立をされにくき艸の

とかり)やつにくき(同 鈴虫)六)猶やつにくき御身のありさまともなり)にく、

あかづりにく、(同 繪合)六)あかづりにく、おぞされて)かきにく、(同 檣)八

御りへりこ、にえ聞えととかきにく、おぞいされ)いらへにく、(同)一ひめ)三

つ、ましくいらへにく、て)補(大和)一ひてもえいひよく、ていりでものをとらせ

んたふれにくき)あどの類)猶上)そへ)にくりる(源)二)上八)心まきせて身

をももてあにくりるべきとて

にく(逃)にく(の所)又出

にくか(そべて)似)ハ)意)あり)いせ物(百)十)芹河)行幸)給ひける時今)さる事

にくかく思ひけれど(行平)の年)さける)源)きりつ)卅)いとさうおはそれ)にけ

かくもづり)とおぞい)源)十二)才)装)上)い)いけ)あき)同)七)卅)にけ)なき)親

増補新言集覽
卷之七

をもちうけたりけるりか 紀伊守のま、母うつせ (源 夕々) 十ましてにけかき事に

思ひてよけかりらむ (同 かりつや) 六にけかりらむかん

よけめ 逃目 (源 之、き、) 卅、ルノ、香の所よげに其句ひさへ花やうにたちをへるもまべかく

てにけめをつりひて 逃めをつらふどのあどめ又つきてあ

にけとづ 逃水 (散木) 夫 六 六「あづまぢありといふる逃水のにけかくまても世を

そをそ哉 を

にぶく 一 (狭) 五 三中大將權大納言の一品の宮へゆきけるまこいにぶくしき事

を見さらばこそあらめ口きよくもの給ふ物哉 事の明白あらむ

にぶかく 入學 (源 少女) 一にぶかくといふ事せさせ給ひて (細流) 東修の

にふたう 入道 (源 若紫) 六かの入道のゆるせんやありつべき心のあらんり

うのとりと (源 若菜) 下廿入道のとりとの御行ひをいとどくし給ひて にぶどうの宮

(源 さま) 廿四入道の宮といかきもやり給ひてくらされ給へり 藤つや

補 にぶくさん 入棺 (榮 玉の村菊) 其事とは入棺といふ事してぞおましまさせける

補 にぶく (万) 卅一 花をみよふふまゑみて

にぶく 鈍 (枕) 七 紙あまさをいかさねていとにぶきかさをいしてきるさまひとへ

たにさつべくもえぬ 是の刀のき (源 まがろ) 二さやうにあさへさる事なりへ

りてかる い きもどり い さかとも立出ておぼしつとにぶきやうに侍らんや

是の心の上 い へり

にぶく にび色 の所よ附そ

にこく 俗と 同く 次 の にこ (狭) 卅二 大貳のめのたにこ と 今本 打ゑて (新

六帖) 俊光 「いりてかきよま生ふるにこ 艸の にこ との と 妹 よ あひ せん (文

選) 東京賦 荒爾

にぞり 濁。体の語、大方濁世の事にいへ (古) 夏昭「蓮葉のにぞりにまぬ心もて何り

の露を玉とあさむ 補 (隆信) 「ひらくさるさとの花の世中のにぞりよまぬ

ちんがりけり (著聞) 卅六 「にぞりかき御代にあひるをみと川をみける鳥の名を

たづねつ、 此世のにぞり (源 繪合) 一かくや姫の此世のにぞりよもげがれせ にぞ

りの末 (同 みゆき) 十 かうくちをしきにぞりのを忍に待とり深くをむべき水こそ出

來がさるべい世あめれ (夫) 卅六 「いりてかくにぞりの末よ生れきて月をむ秋をあ

またまつらん にぞりなき心 (源 さま) 六にぞりか死心よまらせてつれなくまぐ

地神新言集 卷之七

菊の花にでりあきよの星りとぞとる(夫)^七家隆「うゑとつる田のもの早苗水をきてに

でりなき世のかげぞみえけるにでれる世(夫)^八俊成「郭公さやりにちりくなく聲の

にでれる世にありせとある哉にでらぬ世(新後撰)^{雑中}「山水にふた、びかけを

やどしてもにこらぬ世こそ身にいられけれにでりぬ^{濁井}(夫)^六冊(仲正家集)^{寄井}

「にでり井にりげをあらべてをむばかりかへいや人のつれあ心を

にでりえ^{濁江}(いせ集)(新古)^戀「にでりゆのままん事こそかさうらめいりぞ不の

りにりげをさねとん^新みてま(順)「世中を何にたとへんにでりゆのそこにあらて

もやどる月りげ^大

補にでりさけ^{濁酒}(万)^三冊「一ろいあき物をおもひに一つぎのよでれる酒をの

むべりるら(職人歌合)酒作の詞、をやりて候うをよでりも候

にでりえづ^{濁水}(拾)^戀「雨ふりて庭にさまれる濁水たがままバクハ影のみゆべき

にでる^濁(古)^別貫之(拾)^戀「むをぶ手の雫おにでる山の井のありでも人よこりれぬ

る哉(夫)^八爲相「とかと川うを波をやくかつこえて志不迄おでる五月雨の頃おでり

て(拾)^{雜戀}貫之「家あがらこりる、時ハ山の井のおでりよりもこびりかりけり(新

續古)^夏祐殖「さらいえぬ色りとぞとる五月雨よにでりておつる布引の瀧にでる

(山家)下「世中にまぬもよや秋の月にでれる水のた、ふさうりににでらト

にでらでにでらざる(新千)^{雜中}宣明「つりへ来てひとつ流のさえせねばにでらトとお

もふこが心哉(山家)上「物思ふ袖よ月ハやどりけりにでらでせめる水あらねど

も(拾玉)^六「ありにとて心よふかくむをべをやにでらざるらん山の井の水

にでらそ^令濁也^ら(盛衰)^{十一}一段其源をまゝたのいませども執し申人下流をよ

でらして云々^同にでそ^同(夫)^冊一長久「苗代の水くみおでりけふよりハ早苗とる

らんかつまこの里

にこぐさ(万)^{零解}(和名)抄の女葳蕤^{惠美}久佐といへるこれりといへり(万)^七十四「あかり

のそと糸のねろの爾古具佐の花つまかれやひもとりせねん(万)^{十六}廿七「いる鹿をと

むる河邊の和草の(新六帖)^六衣笠^{内大臣}「たぐ霜よれおけらああがらの箱根のね

ろあけけるに草(同)^{信實}「にこ草をつむやかたみのめをあらまあらきをきてハ

とまりやハせん(同)^{爲家}「あかきの中のにこ草まちりくてけけるおもひのそと

ハいらかん

にこやり^今もいへり物や(万)^{十一}冊九「あー垣の中の似兒草爾故余漢おこれとるみ

て人よいらるる^どわ^にこより^同(雄畧紀)^{二十}温矣(文選)^上林綽約(源梅のえ)^{三十}

にこやりある方のかつくりさへことある物をこい書の補(万)十四秋風にかびく
川べのよこぐさのにこよりありもおもゆるりも

にあふ合似あひ(源 東や)廿御りたちともいときよらよにあひより形のかきたもこきた
日記。例のなだらうにいへる也(土佐日記)男もそといふにきといふ物を女も

してこ、ろみんとてそるありけり(蜻蛉日記)中上身のうへをのみするにきにい
るまどき事なれども(源 明石)卅五ねなトやうに繪をかきあつめ給ひつ、やがてどが

御ありさまをにきのやうにかき給へり(同 繪合)十九まのくいきにきよあらせ
にきして(狭)十六四下四二が世よありける事とも月日たいりよいつ、にきしてさ

るべき所くへ繪をかき給へり(にきのからひつ)同(一)十八上にきの箱(源 繪合)九六
にぎひふ賑俗にいた繁昌又ニギヤカなる意あのみ思へど(欽明紀)の黠のこどく富

みれに煙さつ民のかまどの賑ひよけり(にきひ、ぬ)堀川(祝師)「にきひ、ぬ民のか
まどのあらトくり國さくえさる君が御代よ(にぎひ、い)テ富める意、俗のタ繁昌ナル意又ニギヤカ

物もてくる人よ云々いさ、けこさせさせ物もないあぎひ、いさやうなれどまく
いときよらよせさせけりかくあぎひ、いさ所よあらひてきこれバあぎひ、いく

るこ、ちを(源 帝木七)すべてあぎひ、いさよよるべきをあり(大和物)五此今のめの
富たる女あかんありけることあ思いねといけいいといり身のさうぞくい

いときよらよせさせけりかくあぎひ、いさ所よあらひてきこれバあぎひ、いく
(源とつね)七御視のあたりあぎひ、いささういともとりちらして(宇治拾)廿九家の

さまをみるよにぎひ、いさくめでたき事物よ似これら富める事又物の源(のり)六
陵王の舞手急よかるやどの末つりたの樂花やりあにぎひ、いさ聞ゆる俗のニギヤ

打とけて笑ひなどをるれば(にぎひ、い)同(さのき)五十いとさりりにあぎひ、
いさけひひ給へる人のまこい打をやみてやせくあなるやどいとをりいけあり

是ら俗のサミシイ顔見ダテノ字鏡(伽)人招反由太介志(にぎひ、い)
ナイ形をいへる詞のウラなり(字鏡)伽又爾支波々志にぎひ、い

にぎる(源 旗)八おかト巢あかへりいかひのみえぬ哉いりある人り手あ
にぎるらん(補)今昔物あぎりふとある弓の革ところくは卷さるをもち(大鏡)よ

ぎりたうひたりけるれよびあまりつよくてうへにこそとやりていて給へりけれ
(宇治拾)十一あるよもあらは手よにぎられたるものを云々さらせへといふもの一

にひいと 新系 (夫) 十 師光 「さあまにまをのにひ系引りけてくる事たえぬを合の空

にひも 新葉 (同) 二 忠定 「見とせば春の難波のうらこりとあゝのにひ葉の淺緑ある

にひそり 新墾 新よ作りた (顯宗紀) 七 出雲者新墾々々之十握稻之穂 (景行紀) に見

えさるの地名あり (堀川) 田家 「にひそりのそゝろの門田をけくて常をむ床をそ

とあらけける イ本 うゑより秋のね やこそ定めざりけれ

にひと 新綿 (新六帖) 五 爲家 「是るがかるふトのくもこのにひとさの高根の雪の色

おけるらゝ

にひたまづさ 新玉 (夫) 十二 信實 「此秋のにひ玉つさのことづても今こそあれと雁の

きよけり

にひなめ 新嘗 (公事根源) 今年のもつ稻を神に奉らせ給ふ代の始の始の大會といひ

年でとのをば新嘗會と申せあり (年中行事歌合) 卅 一番 「にひなめやきのふのもつ

ををさめおさけふとささまふ雲の上人

にひむそび 新結 (夫) 十 知家 「今やこれ秋おく露のにひむそび時へ來よけり袂をさしも

にひくはまゆ 新桑 (永久) 貢物 「まつき物よひくはまゆの糸をもてくる手もたゆく

そかへつる哉 (夫) 廿九 貫之 賀御屏風 「ことおひのにひくはまゆのから衣千代をうけてぞ

いとひそめつる 補 (万) 十四 つくさねのよひくはまよのきぬのあれど君がみけい、

あやにきなりも

にひまあり 新參 俗云云 (後撰) 上 春ある人のもとに、ひ参りの女の侍りけるが月日

久しくへてむ月のついでち頃より前ゆるされりけるに 云々 (詞花) 下 にひ参りて

侍りける女のまへゆるされて後 云々

にひまくら 新枕 (いせ物) 廿四 「あら玉の年の三とせを待とびてさよひこそに

ひ枕それ (千) 戀五 中院 右大臣 「まことにやとせもまよで山城の伏見の里に、ひ枕をる

補 (續千) 戀三 泰宗 「もろとも打とけられぬよひまくらかおせるよはもくるしりけ

り (同) 同 よみ人 「おそるあよむをぶ一よのよひまくら夢をりあるちぎりなりと

も (新後拾) 戀三 氏清 「あそざりつらさをかこつことのもよ今さぬる、よひまくら

な (同) 同 宗遠 「涙のみかさしく袖のよひまくらいくとせぬれてこよひをそらん にひ

まくら 新 手 (万) 十七 「若艸の新手枕をまさめて夜をやへてんにく、あらあ

くに (源) あふひ 四十 九 にひまくらの心くるしくて夜をやへてんとおがごとづ

らるるれば

にひでろも 新衣 (夫) 卅三 隆信朝臣 四品 してけ 「紫の初し不染のにひ衣をどかく

色のありれどぞ思ふ

〔にひさきもり〕(万)廿五「ことゝめく新島守が麻衣肩のまよひにされりどりえん

〔万〕十九「今かへる爾比佐伎母利がふかぞをる 云々(暑解)大宰府は防人司あり西

の兵とつうのそ也あらに立

行をにひさきもりといふべし

〔にひまもり〕(夫)十六順徳院「くれり、るにひまもりの霜の袖氷をてそをそれか

とに(夫)卿のみこ「あふ事のにひま守が肩まきる麻の衣のまど不きとや(同)

通具「ゆきあぬかこのまよひに霜をおくにひまもりのあさのさ衣(新千)戀一

そくもさくまひまもりが夕けふりさえさにあへせ身をこがいつ、

〔補にひも〕新喪(万)九ノ新裳之如毛糸かきつるりも

〔にひもの〕新物(夫)十二「きのふこそ神田の早苗いそぎけさけさけひもの、とど

ひらくかり

〔にせゑ〕似せ。今いふ似(著聞)十六にせ繪を御このとありけるに北面下臈御隨身か

どの影を左京權大夫信實朝臣をめてか、せられけるよ 云々(補)頼阿(水蛙眼目)云

又嗟峨の山庄の障子に上古以來歌仙百人のよせ繪をかきて(まは鏡)第十二老御か

さちもたぐひかくうつくしうおそいまして人の國より女の本とたづねんよこの

宮の似繪をやらんかどそ父の御門もおせられける 云々(東鑑)仁治二年の條は十

一月廿七日 云々 當將軍家御時關東射手似繪可被圖之由有具沙汰とあるこ

れも似繪と訓べし 繪を似せとよめるに是る此書よ(蒙古合戦繪詞)うまをそくよ

せ繪 本書よ似かは繪也といへる顔のみよあらそ何よても物の形

〔にせ〕にせて 命似 けるの所は附そ

○保の部

〔ほ〕穂。稻蘆す、荻あどにい 不ひろふ おちぞ(いせ物)五十此女とも不ひろいんと

で云々「打びびて落すひろふときりませばこれも田づらあゆりまゝ物を じり不

(夫)廿八「難波江よひまかくよる白波と見えこそとたれ芦の若穂の 不し出(枕)

十二不し出たる田よ人おそくてさどぐ(古)貞女「今よりほうゑてたし見下花を、

さ穂よ出る秋のびりかりけり(同)やな 「秋の野の草の袂々花を、さ不あ出て

まねく袖とよめらん(新古)夏式子「たそがれの軒端の荻あともをれば不し出ぬ秋

ぞ下ることとふ 不あ出て 出せ いたせ ちと穂、帆、火、よかけて一つ 帆よあぐる あらはる

〔穂波〕穂むけ 穂たち 穂さき 穂末 ちと別 かり穂 のさぐひ上のか

〔ほ〕帆(枕)十一「たゞそぎあをぐる物、不あけたる舟(盛衰)九ノ白き帆りけたる小舟

御修法の壇こぢち僧かどもあるべき限こそまりでねろろくとささぐを見給ふ(同 夕きり)六修法の壇こぢちてろろくといづる(かけろふ日記)十三 涙ぞろろくとこほる、(狹)廿一 涙のろろくとこぢる、(夫)廿六 清輔「旅つとあもたるか
れいひのろろくと涙を落る都思へば(源 もみちの賀)廿八 とかく引いろふとよほこ
ろびのろろくとたえぬ(袋法師)袈裟ころもろろくとぬぎすて、(今物語)十 頭
ひをづりみよおひて紙ぎぬのろろくとあるうちきたる(發心集)七 ろろくと
ある布小袖かど昔かりよたよ見ざり姿かきま(うつ布 國ゆづり)廿九 ろろくと
死給ふ(かけろふ日記)六 またほろくとちあきて(源 せゆき)廿九 ろろくとなき
て(宇治拾)廿三 此僧哀し尊くおぢえてろろくとなかる(永久)常陸「あふ事のか
野の死をまつま戀あうべろろくと立るあくらん(新六)二 衣笠「秋さきハ野
よあくさとのろろくと涙こほる、夕まぐきりな(玉)釋教 行基ばさつ 「山鳥のほろくと
となく聲きけバ父りとぞ思ふ母りとぞ思ふ(源 やとりき)九 栗などやうの物よや
ろくとくふ(補 源 横のーら)九 さふらふ人々もほろくとあはあへり(同 とうき)七
ろろくといさくあはて(同 横のーら)廿 四を、しく終んト給へどろろくとこほる、
けいさいとあまをかり(同 やとり木)五 さまもろろくとこぢち給ふぞ色めりて

御こ、ろなるや(宇治拾)九 二、ほろくと物どもこほれおつるもの(同)十五 うち見
あけてろろくとあきり(著聞)十六 ろろくとあはて聞けり(同)廿六 ろろくと
と涙をこぢちて(二條大皇太后宮大貳集)「みりり野あとびさつ死はろろくと
かくくとこれもかあしとぞ見る
(ろろお) 滅。身家國、又罪(夫)廿五 罪ふりき身のろろおやと音あはくちちの浦をゆき
てたよ見ん(宇治拾)廿一 哀と思ひてそれがためよさまの罪ろろおべき事ども
を給ひけるとぞろろおる(盛衰)廿七 四段 さればたすかほのまれよろろおるのろお
(ろろび) (ろろびなん) (ろろびぬ) (ろろびん) (伊勢物) 六 十 いとかさはなり身もろろび
なん 云々 身もいたづらよなりぬべけれつひよろろびぬべとて(大和物)六 國の
司民つかれ國ろろびぬべとなんよおはと聞一召て(宇治拾)十二 かくてをなくな
りなん今のろろびんもくるからにやけろろび(大和物)三 純友がささぎよあひて
家もやけろろび物の具も皆とられさて、(ろろぢす) (盛衰) 四十一 大將軍のむり
ことによいと申その身をまつたうして敵をろろぢす (ろろびせ) (なせいふ) (ろろぢさん)
(ろろぢさバ) (いん主) 己が身の罪をもろろぢさんと 云々 (榮花山) 九 いかでりの罪
をろろほさバやと 云々 (ろろぢ一) (うつ布 俊蔭) 己が身の此山よろろほすとと思ふ物

不くらひらき上十二あはすのれど、御ときよく打笑ひ給へばひとさびし不、と笑ふ

(榮 月の宴)五十八、女房の十廿人と出でて不、と笑ふぞやいとこそ腹さ、いかりつ

れ補(うつ不くらひらき)上十一「さびし不、とわらふ」

不、かふり類冠(盛衰)卅四三位これをそらふ着て類冠一給ひたりければ衣短う

て腰のまひりを過ぎ墨の衣の中より顔はくりさし出て脛あらひなり

補不、かす(落く不)不、かし給ふ(玉勝間)五ノ十見合すべし

不、づき酸漿(和名)廿一酸漿保々(枕)廿三大ききよてよ死物、不、づき(源の日記)

十五玉かづいとをりしき色あひつらつきなり不、づきとりいふめるやうよふくら

りよて補(榮 初花)御いろしろくうはむしう不、づきなどをふきふくらめてすゑさ

らむやうにぞ見えさせ給ふ

不、ゆりむ人の物いひ物がたりの實にさぐひてかさりあすをいふ(源 あさのや)八

人の御不とかきさまなどにつくろされてその折につみあきこともつきとゑうま

ねびあはれに不、ゆがむ事もあめれをこそ云々

打不、ゆがむ(同 且かな)卅二すべて世に人の口といふ物あんとがいひ出は事とも

あくおのづから人のあうらひあど打不、ゆがむ思ははるることいぞくる物あめは

を不、ゆがめ(同 と、き、)卅六式部卿の姫君は朝が不奉り給ひ一哥あをすこ

づ、不、ゆがめてかたるも聞ゆ不、ゆがみ(枕)廿二見くはしき物、夏ひる終して

おきるとは云々えせがとちいつやめきねられてようせせ不、ゆがむもいつべし

補不、め(散木)「郭公あけぬあけきの杜よ來ていと、も聲を不、めつはりあ

不、あむ(契冲云)口をひらき齒もとをあらささを忍びて笑ふ不と頼ますこ

其さまの顯れてみあるあり(遊仙)六忍笑(大鏡)五 不、あむけしきまづりけあり

打不、あむ(うつ不 藏開)下九の君おもてありて打不、あむての給ふ事もあきを

(源 と、き、)五 われもおほし合すは事やあらん打不、あむて(枕)六打不、あま

せ給ひて(榮 若枝)十打不、あませ給ふ不ともその内にて何事あらんとせむろ

ハハハ思ふべし不、あまるおのづから思ひ(源 紅葉の賀)卅 かさこま不、あまは

(同 タか不)十ハけよと不、あまれ給ひて。此以下花不、あむあまこころ(好忠集)

正月「句ハねぞ不、あむ梅の花をこそこれもをりしとをりてながむれ此哥を末摘花

万葉とて引た(源 末つむ)六梅はけしきをみ不、あむここれはとりこきて見ゆ(同

こてふ)三外はさかり過ぎは櫻も今さかりし不、あむ云々補(濱松)上、不、あむての

たまそは(宇治拾)廿八利仁うち不、あむて何事ぞとふ(源 藤のうらは)七うち不、

ゑみ給へばけしきありてよひきよけかり(うつろ 樓上)七うちろゑみ給へば

不程 (荀子) 致仕 程者物之準也 注程度量 之總名 (説文) 品也十髮爲程十程爲分十分爲寸

書其餘字 期也式也限也量也かどこえてもと量數より出さる詞也故クヲ井分上格ア

ヒ分量ヤウスカツカウ又カキリアテド又折頃時分又アヒタ間内又邊アタリなごく

さくくのやうなれどもとの皆同くホドラヒの意よて俗よも人の分上物の分量をど

すべておあト不とも又オナジクラ井ともいへりされバ心よ思ひ得れハさととりや

すからんやういりにも譯すべし おあト不 同格の(源)きりつ(初)おあト不どそ

れより下らふの更衣さちハ 云々 人の不同 (あつまや) 初人の御不との只今世よあ

りがとけあるをも 家のほど 身の不枕 八かどてり其門せばくつくりてすミ給

ひけるぞといへバ笑ひて家の不と身の不とよあせせて侍ありといらふ

不よつけさる 次の不と (源)こしひめ) 四 不よつけさるこ、ろあさ、よて

不とあらぬ (同) 帯木 四十 いりよ不と いらぬやうよおがすらんと心かがらもむね

いさく 是も俗おいへる 以上 身の分上すべて (新續古) 春上 道遠きいく野の霞いく

へとも不とこそいら春の夕くれ 分量の よき不源 (空蟬) 初よき不とよりくてと

ちめてんと思ふ物から 俗と同ホド 不とよりハ (同) 東や 三 事好しとる不とよりは

あやうあら、りあむかりびさる心ぞつきさりける ヤウスの意云々のヤウ どの不と

(同) さのさ 三 御年の不とよりハおとあびうつくし御さまよて カツカウの意年ノ

合セテハ よむひの不 (同) 紅葉の賀 廿四源内よむひの不といと不しければあぐさ

めんとおがせと不とよて (六帖) 五 田子のうらの浪間よあそぶ濱千鳥いつを不と

よて戀しかるらん 限りの 此以下 折頃時分 (枕) 八見えバ笑ハんかといふ不とよしも

これ參らせんとて御硯かどさしいる (源) あけまき 物れもひとされ給ひける不との

けハひ (同) と、さ、 三 あぞりあしめほ 不とよりハ (同) 東や 廿 故うへのうせ給ひ

不とハ いふりひかくをささき御不とあて (六帖) 五 一人れ物思ふ不とのこが袖

ハ秋の草葉よおとらざりけり (後拾) 別慶範 誰よりもこれぞかあしきめぐり見ん

不とを まつべき命あらねバ (金) 別行 待つけんこが身かりせをかへるべき不とを

いくさび君よとハま一 月の不と (竹とり) 月の不とよかりぬれば 云々 彼岸の不と

(うつろ 院) 十 ひがんのほどよよき日をとりて やこのほど (かけろふ日記) 中

やこのほどなればくらくあるほど 日のくれ (同) 中 にくらくあるほどよぞかへりた

は夕くれのほど (源) 桐つば 十 俄よとささむき夕ぐれの不と 夜中すぐる不と (同) 八

夜中打過る不とよあん 云々 あけそつは不と (玉) 雑二後深草 名よたて、八聲とい

へど明まつは不どをかぎり鳥のかくあり。此以下の間内など(源の、さ、)一さ

いむりひて見ん不ど(同)廿今さりと七とせあまりの不どはおぞしき侍らん

年頃の不ど(源 東や)一とるうかるところは打つきて過し侍る年ころの不どよ

不どふる(不どへ)かけるふ日記中上「まゝ水のまゝて不どふる物あらばおぞ

ぬまよぞおりのたちあん(源 かりつや)二不どへばすこし打まざる、事もやと云々

くれまつ不ど待間あり(六帖)五「けふよりの川の水をやくゆけくれまつ不どを久し

と思つ夜の不ど(枕)雪山の所よの不どよきえぬらん事といひくんせれば夜の間に夜

(續古)旅忠韓「都思ふこが心しよその月不どの千里の山路こゆとも是もこ、よりの

と間のか、は不どよか、あるうちお前の事をうけていへど別事といひさる不どよ

端あい(榮 花山)二か、る不どよ年號りそりて天延元年といふ(同 月のえん)か、る不

どよ天徳二年七月廿七日よぞ九條殿の女御后よとせ給ふ此物語はかくてふる

不どよ(かけるふ日記)十七中上かくてふる不どよその月つこもりよ云々道の不ど道の

(枕)八のせらせ給ふ道の不ども云々か、は不ど是の意あり(源 かりつや)八り、る

不どよさふらひ給ふ例あき事かれさ云々その不ど其折其間(りけるふ日記)十一中

その不どのさふ例の事かれはるさきちりき不ど近き間近き邊(源 玉かつら)十七

ちりき不どよ八さとの宮と申す(むねの不ど)胸の(宇治拾)十八ひやうと射さり

けれも御むねの不どよあさるやうまで(不ど)是の俗にも誰と誰との(枕)廿六世よこ

と人出て見つけし宰相とそことの不どあらんとおしそりつ(不ど)是のヤウヌシ

(榮 月の宴)十八りつと後の御よめあつかひの不どいとをりくかん見えさせ給ひけ

る不どよ此不どのヤウヌシの意あてに故よの意のよ也。俗は問又不どあ

(源 かりつや)四お前さらはもてなさせ給ひし不どよおのづからりき方よも見え

しを(補 新古)春上通光「まゝ江や霜もまさひぬあいの葉よつのくむ不どの春風ぞふ

く(續後撰)夏順徳院「五月雨の雲のまきまをまちえても月見は不どの夜いぞすくあき

是等ハハカリ(不とをかり)是のほどとばかりをさねたる(かけるふ日記)五上下あす

あさての不どばかりよの参りなんとて云々(六帖)の間ノミ内ノミ(六帖)上「世

中を思ひ定むる不どばかりわがこ、ちよもまかせさらなん(不どを)別(補 新古)

哀傷「あまきとも心し思ふ不どをかまいたれぬべくいとひもこそせめ(大和物)「あ

西行「あまきとも心し思ふ不どをかまいたれぬべくいとひもこそせめ(大和物)「あ

りそてぬいのちまつまの不どをかりうきこといけくかけかきもがな(續古)御門院

相「あかきよのねさめよれもふ不どをかりうき世をいとふ心ありせき(續後撰)朝光

「けふりとも雲とも見えぬ不どをかりありとおもむ人ぞりなき(續千)秋上「立

こめて日影へさつは不どまくり霧のまがまよのこは朝が不(新後撰)冬、永福「れの
づららこ不りのこれる不どまくりたえとよめく山川の水(續後拾)春下「山ふき
のちほをまつまの不どまくりをらでも見せよるで川のかと(新後拾)朝村「長月の
有明の月の不どまくりぐれい冬をいそげむが(同)戀二「うつ、とも夢とも
見えぬ不どまくりりよまぶるせ下ひもの關(玉葉)親王覺助「うた、ねのこト
りき夢の不どまくり老のまくらよむりしをぞ見ほ(山家)「君あいうで月よあらそ
ふ不どまくりめくまあひつ、うけをあらべん(月清)四「おもひねの夢よかくさむ
不どまくりまくら露のよまのむらさえ

不どろただら同く(万)六十庭も薄太良よと雪ふりさり一云庭も保杼呂よ(同)同

「わがせこをけふり」といで見れもあわ雪ふれり庭も保杼呂よ(不どろ)同

八五「あわ雪の保杼呂よふりいけバ(夫)廿二「わらびをりくはまれ小野

をきて見れも雪ふりあけり不どろよ是も同意也夫のいさらびの不どろ是ハ同

ケタルをい(堀川)散木十九「春くまバ折る人もあき早わらびいつり不どろ

よからんとすらん(散)山家上「あ不さりあやき捨し野の早蕨のをる人かくて不

どろとやあは(方丈記)わらひの不どろをいきつりかきをきして(不どろ)契沖云呂

夜の不ど也。宣長の曉がさうそくとあくる時をいふまだ不のぐらさ(万)四五「夜の

うちなり不どと不のと同語也云々といへり。今案する契沖の説也(万)十四「夜の

穂杼呂わが出てくれバ(同)同「夜の不どろ出つらく(同)十五

夜ふけぬと御せうそく申せと(云々)六おきまよの不どろあ参りてたまよ(云々)

不どまいる(白文)廿八黒龍飲渭賦躍干泉(同)十二銀餅乍破水漿迸(遊仙)黄龍

透入黄金釧平治物語上、三條殿をやつくりりさねたる殿舎の烈き風よ吹さ

てられて灰燼地あ不どまくりけれ(云々)

不と打さ、く音をいへり平家物一、妓王が事を竹のあま戸を不とくと打た、

く者出来たり次又出拾戀「宮つくるひどのさくみのてをのおと不とくとかる

めをも見し哉是ハ危きめ同戀「あけきてほ人いる山の斧のえの不とくとくも

かりあけはり是ハ程々又(万)七不とくとくよてをのとらえぬ共ハ斧

かけていへ(著聞)廿五門を不とくとく、く

不と契沖云上のとをそと下のとを濁るべし殆の字をホトンドとよむ此不とと

ノ又モチツト(源)花の宴十翁も不とくとくまひ出ぬべきこ、ちあん侍り(同)もみち

の賀廿女あが君くとむりひて手をさるま不とくとく笑ひぬべ(同)玉葛廿か、は

御さまを不とくとくあやうき所よづめ奉りぬべかり(同)東二あづまの方のこ

るりある世界お年へけきはよや聲かど不とく打めがとぬべく物打いふ(枕)十七
 ある事あらがふいととびうこそありけれ不とくゑとぬべりり(同)八六
 のやらせ給ふ道の不とも殿の御さはうごといふとく笑ひて不とくうちと
 よりもおちぬべ(同)八十二 夜どのよ糸て侍りけるわらとべも不とくやけ侍りぬ
 べくおん(方)よも多(補) 廣足云殆の字をホトンドと訓ハンはね一音便より下の
 (方)廿三「春されはそがはあそ野の不と、ぎす不とく妹よあそを來まけり(同)
 十五廿七「うへりける人きされりといひうは不とくよき君うとおもひて(枕)廿八
 これも不とくえのるまどく侍りつはを(車)源(夕霧)四十 不とく御心まどひぬべ
 りり(顯季卿集)「つげさらばこそおからひて不と、ぎす不とく山お入やい
 ま(閏五月)の歌也(宇治拾)不とくよきさまお見ゆきはまことにさわぎまどひて(同)不
 とく「何やまちとかんつりまつるべく候つるに(源)藤のうらと)九みさりて、ちいと
 さへがさうてまりせん空も不とくくこそ侍りぬべけれ
 不とく(同) 同意なきど是一つの詞(土佐日記)ぬくりかく風ふきてとけと
 もくくりへいぞきよをぞたて不とくく打めつべ(後撰)三人のものとより
 ひさうて、ち煩ひて不とくくかんありつるといひて侍りければ云々(うつ

不たつのむらとり)一侍る所に不とくく侍りつはを見給へあつうひておん(源)の
 とき)九 不とくくこそ吹きたり侍りり

不とく(同) 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは
 ありの約也(拾)戀さざもりがを侍りける女に國茂が忍びてり

よひ侍りける不とくにさざもりまうぞ來さばまどひてぬりせめにりくしてうら
 のとよりにが侍りけるつとめていひつうりける 國もち「宮つくはひさのさく

みのてをのれと不とくくはめをも見りか(うつ不 藤原の君)ちひさくて病
 て不とくく侍りける云々その罪おそろき病つきて不とくくいまは

は(源)十 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは
 一をぞらへ給ふ

不とく(同) 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは
 是の程ふ(拾)戀「あけさこる人いる山の斧のえの不とくくも

かりあけるりか(六帖)二「ふトの山あけさこはてふ斧のえの不とくくもあり
 一不とくを

不とく(同) 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは
 おのまぐ(源)四 數からねと不とくくよつけてりきり

つ、も見侍りなん(同) 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは
 二此御光りを見奉はあさり不とくくよつけてさか

りなしと思ふ娘をつらうまつらせそやと糸がひ(同) 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは 不とくくは
 一不とくくよつけてあ

まゝの人のそねみをれひ(同 東や)三 とくいりめうかどあれをそとくしつつけて
の思ひあがりて家のうちもきら／＼しく物きよけすみなり

不とり不とりりり (神代紀)六 即放火烧室 云々 次避熱而ホトホリチ云々(同)九 火熱ホトホリとよめり、是の
(枕)八ノ 宣房 云々 などいみとらうまめたちてうらと給ふ 云々 人々詞 さはべきこともな
さを不とりなり出給ふ 云々 抄 うちらと腹 案する火熱より
出たる詞なるべし

不とり、さす(事物異名)下 杜鵑子規子 審審周催歸杜宇杜宇本蜀望 帝也化此鳥 杜主蜀魂(佛説
十王經)四 一切衆生臨命終時閻魔法王遣閻魔卒 云々 即縛三魂至門開樹下樹有
荆棘宛如鋒刃二鳥栖宰一名無常鳥二名拔目鳥我汝舊里化成鸚鵡示怪語鳴別

都頼宜壽此十王經の偽經あるよし之やくより人いふゆりさき (江談抄) 三 負香手鳥
乎呼云保止々岐爪 云々 藍縷鳥者鶯子也昔人宅之樹爾 造巢生子漸生長之比近臨
天 見之自鶯頗大鳥羽毛漸具舐其羽即奇思之間保止々岐須 鳴去了(万)九ノ「鶯
のうひこの中の霍公ホト、ホスひとりうまれてさが父は似ていひかりきさが母は似ていひな
りせうの花の 云々 (同) 廿一 「もつ人不とり、ぎすをやまきみ見んいまやかがくは
戀つ、せれば(夫)八 寂蓮 「鶯れふはすよとめし不とり、ぎまうへらばさそへ雲い
るこそ(同)元 方 「さちりへりさがとへバリも不とり、ぎまれの各名をのきななるなる

らむ(貝原翁大和本草)本邦之人誤てを鶯鶯杜鵑也とを誤り也今不、ぎまといふも
のハ杜鵑也鶯鶯ハ杜鵑ハあらは鶯鶯といふ鳥也又鶯鶯を和書ハ郭公とハ布穀とを
非也郭公ハ別物也

不とり邊 (竹とり)不とりより 此よりい ぎまありきそ 水の不とり(古)上 水のは
とりハ梅花のさけりけるをよめる 川の不とり(伊勢物)九 其の川は不とりあむれる
て宮の不とり(源をとめ)五十 中宮のふはき宮の不とりをれまゝの不とり(同 若菜)
下五 九 ねまゝの不とりにさるべき人必さふらひ給へば不とりよつきて(同 よまきふ)四

此宮の木立を心よつけてもあち給へせてんやと不とりよつてあかひし申されば
を(兼盛)駿河のがまよて神といてりへるよいもの不とりをゆくとて(万代)惠
「紅葉の系深山不とりにやどりて夜そのあらに物をこそれもへ(源 楨柱)廿 人
ひとりと思ひかゝづき給へんぬぬぬ不とりまでもよふふさめしこそあれと(土佐)
池めいてくがまり水つける所あり不とりハ松もありき

不とり不とりババ ホトリメク 意よてこしちうはあささくある意也(源 東や) 廿 一をのこゝか
次のも同意よて物のこしつ方を事とするをいふ
どの多かるに所もさし此御方にまらうとほみつきぬればらうかど不とりバみさら
んにまませ奉らんもありせいと不とりく覺えてとかく思ひめぐらす不とり宮あとい思

ふかりけり(同)十一いさけかく年足らぬ不どにたれをともちんトちの親のやんごと
かく思ひれきて給へらんをこそ不いかふふにせめゆらさやうの不とりのみと
らんふるまひせべきにもあらざとあんの給ひつる

不どかゝ俗と問ナキありなく(後撰)別公忠「いとせめてこひしき旅のから衣不どかくか
へは人もありなん(山家)上「けふのみとれもへはあがき春の日も不どかくくる、
こ、ちこそそれ(源 あけまき)六十とりかくておひしきまいては不どかくかへり給ふ
があかきくるしきよ不どもかく(うけろふ日記)廿五かくて不どもかくふトやうの
事あるを云不どかき(源 浮舟)七十羊のあゆみより不どかきこ、ちは不どもかき

(同 桐壺)八 御使の行りふ不どもかきに
不どかゝ是ハヒツキをも又チヒサキセバキかどをも(拾)戀「海もあさし山も不ど
かゝわが戀を何によそへて君にいはず不どかき(同)雜春「ひきて見る子日の松
いへりとうるまたらば何ホドモナキ意あり

いへりとうるまたらば何ホドモナキ意あり
かゝわが戀を何によそへて君にいはず不どかき(同)雜春「ひきて見る子日の松
いへりとうるまたらば何ホドモナキ意あり
えぬ扇の不どかきあはゞしき風をいりてこめけん(夫)九家隆「打むらふ扇の風の不
どかきに思ひこめたる萩の音哉不どかき庭(源 夕顔)十不どかき庭にされさるくれ
竹不どかきあこめ(同 あふひ)卅不どかきあこめ人よりいらくそめて不どかき床

(拾遺愚草)中「旅枕こやもかくきぬ芦の葉の不どかき床に春雨ぞふる 不どかき身
(六帖)二「さぐ戀はとくらの山にうつしてん不どかき身にたれ所かゝ不どもかき

(散木)下「不どもかき朝か不にれく露の身の何うきことを思ひをるらむ
不どく常にもいふ詞也不ひひもの約よてひもとく意う此哥よ(續古)釋教「うーとて
ていさとの意あるべし此外管見よひいまど見及ひせ

も思ひ不どけは夢の世をいとふ人のさめぬかりけり
不どけ佛(枕)廿四ふたんの御讀經あるに佛かとりけ奉り法師のゐたるこそさらかる
事かれ佛の身(拾玉)一「さうねがふ心の花しひらけあは佛の身よやならんとをら
ん佛のたね(同)四「もさちあまりいつ、のもしああらはきて不どけのたねはかく
れざりけり佛のみち(源 うき舟)十 けあどとりさし佛の道あり忍びありくらむ

(拾玉)四「よしの山おくのすみりを尋ねつ、佛のみちこれよりぞむる 佛のみ國
(同 不ふみみ)六けにこ、を置いていりからん佛の御くによりいりやうの折ふしの
心やり所をもとめんとみえさり(同 初)いける佛のみ國とたれや 佛のみ名

(拾玉)六「何とさき口をさひまで契りける佛の御名はなむあみさ佛佛よまぐくこ
が経(月清)「こん世まで長き賢となるもの佛よみぐくこがねなりけり 佛がさち

(源 よもさふ)十 不どけがさちのへんげの身よこそ物し給ふめれ 佛ひ下の(同)十 不

とけひとりも罪ろろきとこそちびきよくし給ふなれ **不とけり** 佛と(同)すま 五

とよもてもろ聲よ不とけりとぞ終ん奉る **佛よある** (後撰) 雜三真 延法師 「思ひ出のけふ

りやまさんなき人の佛よなれるこのとと君 **枕** 七 佛よありたらんこそこれよ

りまさらめ **佛の使** (續古) 釋教傳 教大師 「此のりやたゞ一こともとく人のよもの不とけの

つらひならせや **佛の弟子** **佛のおろし** **枕** 四 佛の御でしよさふらへば佛のお

ろし九べと申せと 云々 佛の御おろしとぞのそくふり 云々 **佛の御日** (瀆松) 二佛の御

日よ月こととに經佛供養せさせ給ふ 云々 **不とけ** (夫) 卅五 「そべらぎの昔あまねきめぐとぞや此をな月の民よ不とけは

(續古今) 序 麻の中のよもぎのたゞいさまこととぞ不とけとして **補** うつは あて宮 廿せ

りいよ名と不とけとして (著聞) 廿六 もろし の事 不とけとして聞せ奉りぬ (同) 十九 透

長櫃よ丹青を不とけとしてつくり花をもてかざりたぞ (同) 七 人くめんくし風流を

不とけとして 云々

不とき (和名) 十六盆 唐韻云盆 瓦器也 弁色立成云 比良加 俗云 保止岐 **補** うつは 梅

の花笠 若ろがねの不ときよりて御ゆとのまるる

不とめく **枕** 三 ぬりづき虫 云々 又思ひかけせくらさ所おとよ不とめきたるこそ

をりしけれ 俗いふ米ツキ虫のホトク とかしらをつく音をいへるあり

不とび (史記) 膠液船解 と點セリ 俗の (和訓栞) 字鏡の脰の字をひきて脰 保止去

と訓せり脰也といへば同義あるよやといへり 案するよ字書およる (伊勢物) 段 九云々

とよめりけれバ皆人うれいひのうへは涙おととて不とびしけを

不り 堀 (落く) 二片輪を 車の堀 よおしつめられていと深き堀よてとよえひきあ

けでとかくもてさこく不とぶ輪をこしをれぬ (和名) 一 五 壘 遠城長水坑也 和名保

不る 堀 (元真) 十 嵯峨野お前栽不る哥 云々 **不り** **不りて** (崇神紀) 十 **開** 池溝 **不りに** (清

慎公) をみかへし不りお藤原のもろさぶを野へは出して 云々 (賴實) 七月十二日宮

の前さい不りよ 云々 **不り出** (源 九 御く 物何くれと谷のそこ迄不りいいてい

となし聞え給ふ **不りし** (後撰) 戀一 「あさしてふ事をゆ、しと山の井に不りしあを

りよりけりえぬぞ **ほり植** (古) 素性 「花の木も今の不りうゑと春さてばうつらふ

色よ人からひけり (夫) 十四 長家 「雲の上よ菊不りうゑてかひの國つるの郡をうつして

ぞ見る **ほりうつ** (源 薄雲) 卅 秋の草をもほりうつして **ほりこ** つ **不りこ** つる り

けろふ日記 六 上 廿 そ、きむら しけりていとほそやりおえければこれほりわ

らさせ給ひ そこし給へらん 云々 長ひつといふ物おうる りう 不り さて、(元真) 十

「春の田を打ちへいつ、不りさつる」云々「ほりあく」(夫)五爲家「こぞいれい水ふる跡

不りあけて賤がりきねおいそぐ苗代ほりかぬる」(夫)廿二後九「ほりかぬる水との

とさくむさし此もを五月雨の浪比下草ほらせ」令堀(拾)下雜内より人の家侍り

ける紅梅をほらせ給ひける」云々「不らぬ」勅おれば云々「奏せさせけれ

ば不らぬありよけり(拾玉)六「五月雨の日をふるま、水こえてほらぬ池あもを

く蛙うかほれ(方)廿一「佛つくるありあさらぬ水さまる池田のあそが鼻のうへ

を穿禮得れるほらん」なごもい

「ほる」欲儒書の訓のホツスルも(拾)春「春の野おほる」見れどさうりけり世に

所せき人のためぬ」草薙をうねさり。堀を。(万葉)日本紀をよ多し其後の哥よも物

「補(方)十八」廿八「がほりし雨のふりきぬかくあらばことあけせせとる年のさうえん

(同)十三ノ。云々「妹り目を不り」欲

「ほり」外。ヨソホカのホカほかじ(古)春上「見る人もお死山里に櫻花ほりの散あん

後ぞさりまし不り」(源)廿一「壺」五もとよりさふらひ給ふ更衣のさうしを外あうつ

させ給ひて(同)廿二「侍従の君と死とえし人」對面給はらんといふそれ外

よかん物し給ふ(同)末摘四「父の大輔は君の外あぞをとけるこ、あの時とぞりよひ

ける(後拾)春上源「じが宿し咲みちあけり櫻花外おは春もあらトとぞ思ふ(拾玉)三

「早苗とる菅の小笠のあらぶさへ外よことある住吉のき」(新後撰)釋教邦長「西よのこ

むりひが岡の夕つく日外よ心のうつりやいそる(風雅)親中二品「此里のそともの

真柴をけ、きば外よとめぬつま木はあり(宇治拾)九時かひさ冷めてて外よ

るかとくむしれ不りを(榮)花山廿八「まつ外をもらひこれ一人よてたへいませば

不りよりも(夫)廿一「津」外よりも光ひさくさやけき月のかくる、山あいの里

「不り」外。是も前のと同意あれど其餘の意よて多くの上よりの詞を不りに(古)上

「ひぐららのかく山里の夕ぐれ風より外よとふ人もあし(源)帯木」十のとやりに

見忍ばんより外よますことあるまとりけり」と云々(同)やとり木」六十「あみざ不と

けより外よ見奉らま不しき人もかくありよて侍り不りの(同)の足き」六「内の御物

思をどよえさらせこもり給ふべき日より外いそがしお不やけ事節會あとのい

とはいるへく事おけきよあはせてもまづ此院に参り云々(枕)五「帳臺の夜行事の

藏人いときびうもてなしていつくろひ二人さらひより外いいるまどとれさへ

て不りの(源)六「五月雨いとどあがめくらし給ふより外の事なく思ふより外

(古)躬恒「身をそて、行やしよけん思ふより外ある物に心かりけり(同)をどめ」四十

又あひ見でやと思ふより外の事を「思ひの外」ことの「心」の外「心より外」などの

上のうさの「その不り」(源のとき) 五いと品たりくえざりける其外につゆなん

つくべくもあらむ「千載」夏「岩間もる」とづを庭よせきとめて外より夏を過

つるりな(貫之)「春霞飛分いぬる聲き」てりりきぬかりと不りのいふらん(元輔)

「千とせへん宿の子日の松をこそ不りもためしよひりんとすらす

不りばら 外腹。俗いムワ(源少女) 七卅大納言の外はらの娘を奉らるなるよ(同 常夏三

れとべの外腹の娘尋ね出てかづき給ふとまねお人なんあり(榮 さまく) 三十外

腹の男君たちあり「いとさま」はありて、おのけり

不りく 外々。俗と同他(源さうき) 十かくてもおとまをまとう皆不りくへと

出給ふ不とよ(同 若菜) 十五月ころかく不りくよてこり給ふ事もさくあま

やうよ人の奏しければ(同 總角) 廿おをト所よお不とのでもれるをうろめたしと

思へと常の事をれば不りくよともいり聞えん(枕) 三、はやうありしものさも

不りくありつるりと田舎よすむものあと 云々(同) 十六ささく物、くらうあり

てまど火もともさぬ程よ外々より人の來集りたる(源 藤のうらと) 十不りくよ

てのおをトか不をうつとりたると見ゆるを

不がらく (袖中抄) 不がらりよ夜のあけゆく意あり(古) 三「あ、めれ不がらく

とあけぬけおのがきぬ」あるぞかあしき

不がらり 明方のけしきも所のさまもアカルキ意也そべてハッキリと物のワカルをい

シキ意あり(文選) 西征賦 豁(遊仙) 廿儻闇之門庭(紫式部集) 「打忍ひあけきあり

せバ志の、めの不がらりよたあ夢を見ぬ哉(夫) 八 仲正 「ほと、ぎはまたせ」てあ

の、めの不がらりよこそあききたるかれ(撰集抄) 四 内外の才智不がらりよて

(源 とうき) 十四今の世のやうとておを不がらかよあるべかしく世の中を御心と

そぐし給ひつべきもおのいそまをべかめるを姫宮のあさはくおをつりなく心もど

なくとえさせ給ふよ 云々(かけろふ日記) 十下いと不がらりに打笑ふ

不りけ 火影。灯の光をいふ又たい灯の光(夫) 四 灯の前よ花を思ふといふ心を 和泉

「夜の不とよちりもこそすれあくるまで不りけに花をさるよもかか(源 帚木) 八

そひふしとる御不りけいとめめでとく女よて見奉らま不(同 うつせみ) 八 かのを

りかりつるほりけならびいりせんよお不なるも 云々(同 そゑつむ) 三不り

けのまたれりりさまのまさやうよても見ま不しくおを補(同 常夏) 十打かこ

ふき給へるさは不りけいとうつくしけあり(同 若菜) 四下卅 不りけの御姿世よかくう

つくしけあるよ(落く不)不けいときよけあり不け姿(うつ不 祭の使) 卅九
のさうぞくのよひるよりあらくてりちたる不けあえさるをがさりぎり
かくめづら(同) さうの院) 卅七 同人の出 身したる所 右大弁むかしのとうえいかりし不かけ
姿おもひ出て云々

不けで、ろ 外心(万) 十一(拾) 八九 戀五 「荒磯こえ拾あら不けゆく浪の外心これ思ひ

下戀てしぬとも拾(後拾) 雜一定輔朝臣かれしはかりて外心をありけき云々

補(拾玉) 五 「君よかれて外心をきつまなればうらがへりさるねたさあるらん

不けありき 外歩(源) をつくし 七 中將中務やうの人々よ不どくはつつけつ、情

を見え給ふし御いとまかくて外ありきもし給ひせ

不けさほ 外様。たゞ他(竹とり) 射んとそれとも不けさまへいきければ(源 帚木) 卅

方ふたけて引たがへ外さまへとおおさんいとしきなるべし(同) 東や) 十 五かこ

く思ひ企られたれどもさらはいさしとて外さはへ思ひかり給ひぬべりかれ

補 不かせ 帆風(著聞) 卅二 戸部氏こそ本躰にて侍りしは近代大神氏よ不けせをと

られてかやうに正賢ももうたへられけるよこそ

不よ 寄生(万) 卅八 「あし引の山はこぬれの保與とりてりさしつらくん千とせ不

とぞ(和名) 二十寄生一名寓生 和名、夜止里 木一云保夜

不 俗よいふキリカブチツコ材(永久) 薪 房 「こりつし不さかりせば冬ふり

き片山里いりてま、し(新六帖) 六 信實 「里人の不ささる冬のふくぬぎ大川の

べのあれまくもうし(長秋詠藻) 「山賤の不ささしあはせうづむ火のあるともなく

て世をもふるりか(發心集) 十一 はさといふものをさしあはせて置たるを見て

此ひとりとりくもいせむひ入て木多くとりくべてせなりあふりしてゐさりける

不 右よ (い不ぬ) 簀を腰よふまのやうよひきかけて不さくひといふ物を

枕よしてまろねまねさり(同) ひの木を人のたぐはしりまめくをとりてこれ

ひろの何と此山の不さくひ驗ありてまさくしとぞ申をといへむ 云々 補(山家) 下

「山ふりま不ささるかりと聞えつ、所まぎまふおの、音うを(万代) 源顯國 朝臣 「大原や

不さ、くしづりあさ衣うらやましくもぬれぬ袖りあ

不 穂田。 稲の穂よ出たる(万) 六 卅 「秋の田の不田をりりねくらやまよ夜の不

とろよも鳴りさるかも 補(万代) 入道前攝 政左大臣 「小山田の不さのりそのつりのまもこ

それねよまぞいねけてよる

不 菩提(翻譯名義集) 三、 菩提聲師云道之極者稱曰菩提秦無言以譯之、後代諸師

皆譯爲道、以大論翻爲佛道故（かけろふ日記）十三中とくーかさせ給ひてぞさいりかへ給へとぞ行ふま、よ（同）九中下此世をそむきて家を出てぞさいをもとむる人よ（盛衰）十一後世ぞさいの御つとめより外他事ありけるぞとに（土御門院御集）「うとんけの法の花あもあひにけりぞさいのさねをうゑてける身（ぞさい講）五末北山雲林院のぞさいかう行ふ所に忍びておひたり（ぞさい聲）榮（さま）九十御佛名とて云々殿上人のぞさい聲もあやよくある迄聞えたり

ぞたいせ（元輔）つくーよて大貳のまかどにぞさいせ奉りあけらる、に云々

ぞさいせのま（落くぞ）三こかねのせまこにぞたいせのまをかんいれさせ給ひたりけるほたいのせ（菩提子の數珠）後撰（三故女四のまこの後のわざせん）とて

ぞたいのせ（右大臣）もと允待ると聞て此せまをおくるとて

ぞたち（穂立）稲の穂は出（万）八ノ「雲ぐくれかくる雁のゆきてるん秋田の穂立」

けくとぞ思ふ（夫）好忠「ほたちれる秋のきあけりおりうぞち早苗つりねー袖もひなくよ（新六帖）二爲家「秋あへる山田のぞたち吹風はあとて心のりさあびきある

（夫）十二久安「雁が沼のうりへるつまさ打されて水田のぞたちふまいたくら

（夫）百首隆季

補 ぞとる火（和泉式部）「ぞとる火のこのーと草もくらからせさ月のやまのなのみかりけりぞとるなす（万）十三十「螢成のりよき、て

ぞたさる（所）糾（つ）な（な）ぞとさ（伊勢物）六十此男よぞたされてなんなきける

（夫）爲家「子を思ふ心バりりあぞたされてうき世を猶ぞ出がてにする

ぞたし（体）の詞。馬の具より出さる詞あて物のさめにつながきておのかま、にならぬ

ぞたし（和名）十五鞍馬具 絆、釋名云絆、半也物使半行不得、自縦也（和名保）（古）

雜下もの、世のうきめ見えぬ山路へいらんよの思ふ人ころぞたしかりけれ（金）下

「みくまのに駒のつまづく青つら君こそまろがぞたしかりけれ（源）上ノ「そ

むく世のうーろめさくいさりりさきぞたしをーひてかけなまかれ（同）九廿か、る

ねがひ侍る道のぞたしに思ひ給へられぬべきあと聞え給へり（同）あふひ（廿）か、る

ぞたしたあそいざらまーり、ばねがまーきさまよもありかまー（同）七（卅）是の

みこそけよ世をまかれんきはのぞたしかりけれ（後撰）興風（春中）「山風の花の香りと

ふふもとあひ春のりをまぞぞとーなりける（興風集）「山里の春のぞたしよとちら

れてすまらまどへる鶯ぞなく（玉葉）戀三、祐子内「逢ことのりくて、えなばあそれ

わが世々のぞたしと成ぬべきりな（風雅）泉式部「あぢきなく春の命のをーきりか

花ぞ此世の不たしなりける(和泉物)いと心深く入給ひあけるをなんなどりかくと
ものさまをざらん不さしまでころおせされざらめおくらし給ふに心うきとて(輔
親)世をうらをの、山路あいる人のさえぬ不たし君にぞありける(狭衣)今
うき世の不たしにてかくりけとせめられ侍る不とに(源 足うな)上 四さらぬさうれに
もはたしなりぬべりりける(同)廿一あさりらぬはたしになんあるべき(同 梅枝)廿
づららもうらををおふなんつひの不たしとありける(同 はしひめ)五か、る不たし
どもにり、つらふたに(狭衣)上 まといくよもあるまトからん世の不たしからん
りしとて

不れ俗いふ放心するにて心を勞す 不るなるべけれど大方 (白文) 廿一年雖老

未及ハカニ 毫ハカニ ほるも是と同語 ほけとも但老人に ほけへりほれて (落く不)

一、帯刀文をお 人やとりつらん いりあること出こんと思ひなけきてつら杖をつき
てはれてゐたるを不れとる(六帖)下六「鳥ならばあさりの木々にあくれるて不れと

る聲に我かりまゝを(忠峯集)なう 不れとて(源 うち舟)廿九これ八月をる物思ひつる

にほれとてにければ人のもどかんもいせんもあられき(ほれまどふ) (同 かけろふ) 卅

人々のうへもおほえを不れまどひてをぐはに(榮 衣のたま) 三 御心もほれまどひて

いと物覚え給ひぬ(瀨松) 四 とにりくに思ひやるうたなくほれまどひる、よ

思ひ不れ(うつ不 藤原君) 廿五ひまりの不し鳥これらをしてとりにてとらばお不

くの鳥出来ぬべしと思ひ不れて給へり(源 わう紫) 廿八いと下うおも不し不れて内

へも参らて二三日こもりおせすれば

不れ右又同意なり 不意なり 不意なり (源 くてふ) 廿二よろの人のかう不れくのあらぬ物ぞよ

(うつ不 樓の上) 下 十二不れくのあらぬ人のこりそくかく覚え給ふ不れく

しう(同) 十四むりの事のくもしうもえり給へせ 云々 今の不れくしうありて

侍れどもその内も参りていとよく聞しめさせ侍りかん(源 よこふえ) 九 あらぬさ

はよ不れくしうなりてあがめ過し給ふめれん 不れくしうの (同 あう) 十 打ひが

と不れくしう事のあれと(同 あけまき) 九十やせ青と不れくしうを物を思ひ

されん(狭) 卅 三 上 あけくれ戀をけきていと不れくしうはまどかりて侍れど云

不れ(源 蓬生) 廿三とてろさまの物思ひは不れくしうを (同 若菜) 下七よほひる

おせしあけくし不れくしうを御り不もをこしれもやせ給ふよ (うつ不 樓の上) 二十

不れくしうをかれる人の

不ぞへ (齊 和名) 七 三 脛和名保曾 腹孔也(神代紀) 上 脛中(盛衰) 十 中宮御 小松

の大臣云々則御不そのをせ切奉りて不そのを(神代紀)下ノ以竹刀ナカ截其兒臍ホソナチ

(紫式部日記)御不そのをの殿のうへ

不ぞ寔。今云帶(和名)十七爾雅云瓊李之類皆有寔都計反和名保會今按寔帶相通

不そまぎ細脛(宇治拾)五お不やけの御前まて不そまぎ出てふぐりあふらんあど

候いんいびんかくや候へりらん(つれ)六段七十毛おひさる不そのぎの不と云々

不そまぎ樓上五十一大御ぐい糸をよりかけたるやうまて不そまぎまづれり

不そまぎ細殿(和名)十廊唐韻云廊殿下外屋也和名保會土乃(万)十三詔大臣參議并諸王

者令侍于大殿上諸卿大夫等令侍于南細殿而則賜酒肆宴(延喜式)卅八諸司座設東

夾舎(源 花の宴)四弘徽殿の不そまぎの立より給へれば(枕)十四内二たりの不そ

まぎの忍びていりふたるこそ云々

不そまぎ細乳(後拾)廿いめのとせんとてまできたりける女のちのはそく侍りけれ

不ぞち熟瓜(和名)十七熟瓜和名保會知俗用熟瓜二字或說極熟(古事記)七熟瓜卅

不ぞち清慎公女御の殿まのこま不ぞちを長びつあいれておろせ給へはを夕立のそれは

御かういおろいさるまぎれあうせられば「盗人い不ぞちをまても雨ふれば不いう

りとしてとりかくはらん(昔聞)十八曉行法師人のもとへまうりさりける瓜をとり出たりけるがころくありて水くまたりければよめ「山城の不ぞちと人や思ふらん水くみたるいひささかりけり

不そる細くなる意にて。髪よいへるい俗よいふ。忍ふ折のいつ不そり(源)夕霧五十

御ぐいをかき出て給へば六尺はりりあててこい不ろりたれど(榮初花)六十あや

いうありい人あもあらせ不そり給ひあけり(同 見えてぬ夢)廿水をのこ聞召ていい

トう不そらせ給へり(源 かつね)六髪のまをこい不そりてさいらりまか、れるい

もいと物きよけまかい不そる(同 をとめ)廿やをらかい不そりて出給ふ道一補(同

あらし)九 あやいき風不そうふきて

不そたまが川(古)の備中の地名(金)夫の(古)大哥「まりねふくさびの中山お

びよせる不そ谷川の音のさやけさ(金)雜上「かくていもえぞをむまトき山里の不

を谷川のころ不そまま夫(夫)卅師光「山里い不そ谷川のさ、れ水おとあふさへぞさ

ひいかりける

不そままち細太刀(枕)八不そままちの平緒つけてまよけあるどのこのもてさるもいと

かまめりい(盛衰)十初段小松大臣い詩繪の不そ太刀かもめ尻よまま給ひ

不そざり 細高 (宇治拾) 十一 九けそこし不そざりよて やせてたけ

不そあぐ 細長 (源 未摘) 卅 五無紋の櫻の不そあぐあよ、りよきあして (同 竹川) 十 姫君

云々櫻の不そあが 云々 (狭) 廿六 上かり物の不そあが (枕) 七 七さぬの名し不そあがをばさ

もいひつべしあぞかさこい尻長といへり (弄花) 貴女のきる物也 一 勘 幼き上臈の

上よきる物也 (雅亮装束抄) 不そあぐといふいれいのきぬのれなくびあききり

不そらり 不ろやりに (枕) 廿二 不そらりあるをのこ隨身かどえぬべきが

不そくごトや 細冠 (枕) 十九 不そくごトやともかどのうしろよるて 抄不そやかな

不そやり ホツリトシタルをいふ大方の形の上あひへりシナヤカコやせ (枕) 九 九

たる意也やか又らかどそへたるい高らか花やかなど、同例あり (枕) 廿四 九

て文の不そやりあるもちて (同) 十五 心ゆく物、雑色隨身 イヤせて 不そやりある (同) 三

關白のいと不そやりよいとどうあまめりうて (同) 廿六 不そやりあるごらり (同) 五

あまめりしき物、不そやりよきよけあるきんごちの直衣姿 (源 うつせみ) 四 かしら

つき不そやりよちひさき人の (同 あけまき) 五 御手つきの不そやりよかよこくあそ

れあるを 云々 不そやぎ 花やかを花やぎと (同 やとり木) 四十 むりよりのそこし不

そやぎてあてしろうたけなりつるけそひかどいさちあれたりとあれやえそ (同)

五十 まろようつくつくこえ給へりし人のそこし不そやぎたるよ (補 宇治拾) 十 十すり

とゆ不そやりあるありけり

不そこゑ 細聲 (枕) 八 二 よくき物、ねふたしと思ひてふしたるよ蚊の不そこゑよ名の

りて顔のもとよとびありく 云々 (補 著聞) 細聲を出して

不そきんさち 細君 (狭) 十九 下さやうの不そきんさちあかけめあておいせんよりの

こえふとりてこちし下臈よひうへて上臈のヤセガタ

チあるをいふこ、大將とさして物々しからせといへる也

不そめ 細目。目を細く 不そめあけて (狭) 三 上廿一 ねろろある今姫君の 母代いと

おもしろう思ふふたへせ心もそなたちて末よはちとりて扇うちあらうていあてま

ろの拍子うつきりくそいあど不そめあけて首筋ひきたて、云々をりしあともよ

のつねの事をこそいへ 云々

不そめ 細め。俗ト同此 不そめよあけて (神代紀) 廿八 乃以御手 ホツメニオケテ 細開 ホソクケテ 磐戸 イハトナ 窺之 ミソナハス

(竟宴哥) 詞 不そめよいとをあけてこそあはせ 云々 (宇治拾) 十八 門をおびた

しくた、きけれバ 云々 いとトきりさ死物忌かりとも不そめよあけていれとまへ

(夫) 三 (同) 卅一 月の夜の聲も 卅一 不そめよ窓あけて心をやれる哥あがめりか

不そめよあきて (狭) 八 二 上つま戸不そめよあきて火の光り不のりよゆ (源 さうき) 三 廿

ぬりだめの戸の不そめよあきたるをやをらおあけて (同 東や) 卅六 さうトの不そめ

よちきたるより不ろめある(同 常夏)廿猶つま戸の不そめあるよりさうどのあきあ
ひたるを見いれ給ふ(補 宇治拾)廿三此櫃のふた不ろめあきたりけり

不ろとち(細道 源 うきふね)卅五雪の後のさ常よりもさりあきまれの不そ道をわけ
給ふほど御供の人あきぬバくりおろろ(岩の細ミち 夫)廿一「ふとどけて更

やこえんうつの山うつろふ葛の岩の不そとち(かけの細ミち 同)雅經「行かよふか
けの不ろとち未たどりこゆとちらるる旅人のこゑ(千)冬「真柴りる小野の不ろ

とちあとたえてふかくも雪のかりまけるる(夫)廿一西行のち「おちてゆく袖も
露わか、りける萩のこしけきのちれ不ろ道(堀百)「山里のまれの不ろ道あとた

えてまさきのかつらくる人もあ(不そとち 細氷 谷の不ろとち 堀川)師「山里ハ谷の不そみづつら、あて岩うつ浪の
れとなよもせき(夫)廿六「下くぐる谷の不そ水むそびあけて岩うつよりも君ハつ

れあ(補 拾玉)一「山里ハ竹のかけひの不そ水ハ心してちれ嶺のもみち葉(月詣)
藤原「ふく風ハ小萩ハ露のちるま、よいてろひまける谷の細とづ

能盛「ふく風ハ小萩ハ露のちるま、よいてろひまける谷の細とづ
不そ(細 万いへり一々抄するあいとまあらま又形の上おや)不そく(ろ かけろふ)
日記(中 月ハいと不そくてかけハ海のおもてようつりてある)枕「紫たちたる雲

の不そくたあびきたる(夫)三花園左大「不そくふる三月の雨や糸をらん水よあや
れる廣澤の池(源 あう)九あやハ風不そ吹て此池ハつき侍る事まことに神の

いるべたがハせあん(枕)廿七庭火の烟の不そろのやりたる(同)十五心ゆく物、白く
きよけあるとちのく紙ハいと不ろろかくべくハあらぬ筆して文かきたる(同)十九

いと不ろろよ不やりなる獨話(不ろき 同)廿三大きよてよき物、をのこの目あまり不
ろきハ女めきとり又かかまりのやうからんハおろろ(同)五、あまめりハき物、白

さくみの不そき(組系 同)六、わたどのハ不そきえんなればこあこのえんハとね
さハ出たり(居宅の 縁也)不そく(ろ 狭)廿九御姿りさつきあと人よりハ不そくちひさやう

よて(源 うつせ)初手さぐりの不そくちひさきと(同)廿一柱「とづからハなえ
たる御ぞともハ打とけたる御姿いと不そろかよさけかり(枕)七たハ隨身四人い

ととろさうぞきたる(馬)馬そひの不そろあさてたるまろりして不ろさ(源 椎本)四十紫
の紙よりきたる經を片手よもち給へる手つきかれよりも不そさまさりてやせく

あるべ(補 三金)道綱「わがやどの柳のいとハ不そくともくるうくひそのさえは
もあらなん

不そびつ(細櫃)河海「絹櫃也(孟津)綿をかけてむりかどる物也(細流)ぬり桶な

どの類(源野分)十不そびつめくものよとひきかけてまさぐるわう人どもあり(枕)廿八きよと見ゆる物、あたらしき不そびつ不そびつのふた(枕)六、青朽葉二藍おどの物ともれまきつ、不そびつのふたよいれ紙おとよけしきまわりつ、とて行ちぐひもてありくこそをりしけれ(同)卅手おとよくもあらぬ人のさまがし物か、ま不しうそるが云々かおま不そびつのふたおとよきちらして不つ、しめなま(堀川)の注、帆柱し筒をつけて帆綱を風よりあけつれろしつさばく事也。祇云川舟し帆りくる證歌あり不つ、しめなまとの帆をうけて風よりせて柱ししめ付る物也云々(堀川)柳「藻かり舟不つ、しめなま心せよ川をひ柳風よなまよる(新拾)をよめる光俊「夕風し不つ、ちめ細くりさけてとはりけそらひよそる舟人

不つえ上ある枝をいふ(古事記)十六中五もあたちわかい本都延鳥とりからし(神代紀)上枝とある(万)廿九最末枝者ちりそぎしけり云々(同)十六「いもがため末枝の梅をたをとし下枝の露ぬれぬれけらしも(古)「わが園の梅の不つえみ鶯の終あさきぬべき戀もする哉(万)十九「青柳の保都枝よちとり(ほね)骨(和名)三、骨、肉之核也保補。人鳥獸魚万(元真)廿五忘れたる人おいひやる

哥云々うへへ「世あしへばくらけの不ねい見もしてん云々(宇治拾)十六三尺をりりある鯨の云々煮て食て云々大なる骨喉あたて、云々(源)よもきふの屋いへり凡帳のいたよこたての木をいへる也今いふヤチシタチの事あり又次の骨を折の哥の傘の骨よかけたり(源)よもきふ六野こきあかりし年云々りあき板ぶきなりしおどの骨のこづりあのことりて(かけろふ日記)十三くろがいの黒柿の不ねおくちものかたびらうけたる几帳ども、云々扇のほね(枕)十二扇の不ねい、あを色いありき、紫いことり(同)廿七隆家こそいみどき骨をえて侍れそれとらせて参らせんとそるぞおぞろけの紙いおまどければ云々(同)廿二不そぬり不ねかと骨いおそれと云々不ねあてつと(盛衰)段一初隨喜の思ひ不ねに徹し云々不ねををば俗語也(新六帖)五信實「さりとてもおせる事あさやおれがさ骨を折りてぞ君あつりへし不ねあがるやせて骨マ(散木)下四、木工助敦隆がのりたることの外おやせよこくしておそかりければおくれりけるをまちつけていりにと、へば敦隆「不ねあがりそぢさへたりき駒おれや

補 不ねぞる骨折(職人盡哥合)詞「あら不ねぞれや(新撰六帖)光俊「山ふかくまことの道にいたる時いごが身おどりと不ねを、るりか(伊勢物語知顯抄)たしちりらどつくし不ねををりたるりひもあく

不を

穂波

(八雲)

三上浪

浪田

とあり。稻のそよきて浪

(新古)

秋上、前大

「風をた

政大臣

は山田の庵をゆる月や不を

のやうあるをいへるあり

やの沖

風過ていくたの小田も不を

とたちけり

補(新千)

秋下

「打をひく田面の不

なと不の

と露吹たて、とたる秋風(續後撰)

雜上

「夢よりもおそくさきハ秋

の田に不をとの露とやとるいおづま

(新後拾)

立てむら雨あがらわたる秋風(同)

同

「夕されを野田のいさ葉の不をみより尾花

をかけて秋風ぞふく(同)

同

「松よのみ音はひびきてそよの岸田の不をと秋

風ぞふく(月清)

「山と不き門田のをるハ霧をれて穂をよとづむ有明の月(玉

葉)

秋下

「くれか、は伏見の門田うちあびまを不ををわたるうちの河舟

爲教

増補雅言集覽卷之七 終

